

## 4. 小 結

「府内古園」

中世大友府内町跡第51次調査では、第2南北街路、街路下の大小さまざまな土坑。街路両側の南北方向の溝、万寿寺を囲む堀などが検出された。こうした遺構は、掘削と埋め立てをくりかえしており、最終的には全て埋め立てられて、「府内古園」に描かれる状況になる。そこで、ここでは、前項で報告した遺構の変遷を説明し、小結とする。

## 14世紀代

万寿寺の建立

徳治元年(1306)豊後府内に、万寿寺が建立される。これまでの発掘調査では、13世紀代に遡る遺構・遺物群は検出されておらず、14世紀初頭から確認できる。このことから、豊後府内の都市建設は14世紀初頭の万寿寺の建立を契機に始まると考えられる。

府内町跡第51次調査でも、調査区の東側で南北方向の区画性の強い溝SD363を検出している。創建当事の万寿寺の規模や範囲は不明であるが、この溝は、16世紀の万寿寺西境の区画の、北側延長上に位置する。その他、この溝の西側で2ヶ所、井戸が確認され、その周辺からは土坑が検出されており、町屋の存在が想定出来る。

## 15世紀代

白色系土師器

豊後府内での15世紀代の遺物の識別は困難が伴う。その中で、万寿寺を囲む堀SD200と14世紀代の溝であるSD363の間で、SD462とした白色系土師器を出土する断面V字の溝を検出した。検出した範囲でのこの溝は、北に向け曲がっているが、隣接する府内町跡20次調査区でも確認されており、万寿寺の北側境に平行して東に延びると理解できる。

ロクロ目土師器

また、15世紀後葉から16世紀初頭に幅年されているロクロ目土師器が、SD363の北部の上面で集中して出土していることから、何らかの遺構が存在していたと想定できる。さらに、検出した万寿寺の堀(SD200)の北西角に隣接する東側の府内町跡第20次調査区で、この時期の遺物が、堀の底の細い溝から出土している。万寿寺の周辺にこの時期、断面V字の堀が巡っていた可能性が高い。

## 16世紀代

16世紀代のこの地区での遺構の展開はめまぐるしい。特に16世紀後葉から末葉は、短期間に展開するためその傾向が顕著である。このため、遺物での時期判断は困難であるが、遺構の切り合いから、その推移を見ることが出来る。そこで、主要遺構の変遷を辿ってみる。

まず、16世紀後葉に先行する中葉での地業として、第2南北街路の東側、SD363上面での町屋整備のための埋め立てSX345がある。そしてこの場所は、御内町として整備される。

御内町

後葉1 調査区の西側で南北方向のSD060が掘削される。府内町跡第18・52次調査では、ある時期の大友館の東側を区画すると理解されている溝が確認されている。この溝の南側の延長線上で検出されたのが、区画性の強い溝SD060である。しかし、第51次調査北部地区と南部地区で確認されたSD060は時期と方向性は同じであるが、断面形態が異なる。南部地区のSD060は北部地区との間で西側に屈曲する可能性が高い。

大型土坑

後葉2 次に掘削されたのが、第2南北街路下で検出された土坑群である。これらの土坑はSD060に平行するように列状に掘削されており、溝の存在を意識していることがわかる。さらに、大型土坑であるSK533は街路機能を否定する大きさで掘削されており、北西部でSD060を切る。

万寿寺の堀

後葉3 この時期に改変されるのが万寿寺の堀SD200である。万寿寺の堀は、先に述べたように、15世紀末から16世紀初頭に断面V字の堀が掘削されていた可能性が高い。この時期、SD200は西側に拡幅したと想定できる。このため、後葉2の時期に列状に掘削された土坑の東側が削られている。また、堀の断面形態は、万寿寺側は傾斜が急であるが、西側は緩やかで、凹凸があることもそれを証明すると考える。堀の拡幅の必要性が生じたが、万寿寺側は堀に沿って築地塀があることで、拡幅できず、西の街路側を拡幅したと理解できる。

築地塀

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

後葉4 第2南北街路の版築状の整備を行なう。この際、後葉1～3の時期に掘削された堀や溝・土坑は全て埋め立てられる。土層観察からその順序を見ると、SD060（大友館南側延長上の溝）→SK533（大型土坑）→SD200（万寿寺の堀）の順になる。また、埋め立てられた万寿寺の堀の部分については天正10年（1582）の文献には「万寿寺築地之内并西之屋敷」の記述があり、屋敷地化していたことを示しており、発掘調査でも立ち並ぶ礎石建物が検出されている。

第2南北街路 万寿寺西側の堀の拉幅と屋敷地化は、この部分の第2南北街路の縮小に結びつく。大友館前は竣工当時11mを測ったが、万寿寺西側のこの時期は、6m前後と想定される。また、埋め立てられた万寿寺北側の堀は第1南北街路と第2南北街路を繋ぐ東西街路になっている。「府内古図」に描かれた豊後府内は、この時期の状況と言える。

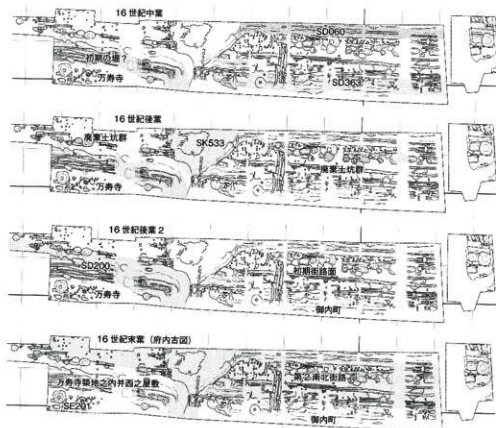
末葉

こうして、整備された豊後府内であるが、天正14年（1586）に薩摩国の島津氏の侵攻を受け、焼失する。その焼土は万寿寺の堀を埋め立てた部分を中心に検出された。豊後府内の復興は、大友館周辺の桜町や唐人町で認められ、万寿寺西側でも焼土上部に礎石建物が立つことが確認されている。府内町跡第51次調査区でも御内町部分で焼土を含む柱穴状遺構が検出されていることから、程度の復興が認められる。また、第2南北街路上面の側溝SD304は街路幅を狭めて敷設されている。

礎石建物

鉄軸の絵唐津

第2南北街路の機能は、上面から鉄軸の絵唐津の碗（第241図8）が出土していることから、その後も継続されていることが推測できる。



第249図 府内町跡第51次調査 16世紀後半主要遺構変遷図

## 第3節 中世大友府内町跡第52次調査

## 1 調査の概要

中世大友府内町跡第52次調査区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5mの沖積低地上に立地する。中世大友府内町跡は、大分県教育委員会が1993年に刊行した『大分県遺跡地図』において「中世大友城下町跡」の名称で登録されていた周知遺跡である。『大分県遺跡地図』は2008年3月に増補改訂版が刊行され、遺跡名が「中世大友城下町跡」から「中世大友府内町跡」に改称されている。また、当該調査区は1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、大友氏館跡東側境界ラインのほぼ中央部に相当し、築地や門跡など大友氏館跡の境界施設に関わる遺構の発見が想定あるいは期待される地点であった。

本節で報告する第52次調査区（第250図）については、一般国道10号古国府拡幅事業に伴い、国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受け、2005年（平成17年）5月9日～11月14日までの約6ヶ月間発掘調査を行った。発掘面積は約610㎡である。本調査区とはほぼ同じ時期に同一事業、同一事業主体による第51次調査区の発掘調査が併行して実施されている。また、本調査区は2006年度（平成18年度）に発掘調査が実施された第79次調査区と西隣する地点に位置している。

## 2 遺構と遺物

## (1) 遺構の概要と基本層序列

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標（旧日本測地系）に乗せた10m方眼で区画している。それぞれの区画には西から東へJ～M、北から南へ1～78の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている（例えばH23区、J26区など）。本節で報告する第52次調査区は、東西H～J区、南北23～27区に相当する。



第250図 調査区位置図(1/1,000)

中世大友  
府内町跡一般国道10号  
古国府拡幅

調査区の西半分は国指定史跡「大友氏館跡」として保存

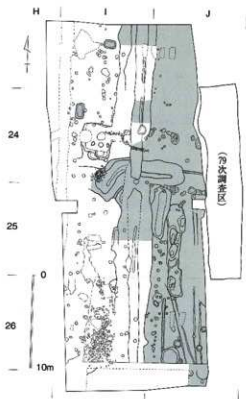
本調査区では、調査区のおよそ西半分が国指定史跡「大友氏館跡」の領域に相当し、保存されることが内定していた。そのため、発掘調査は調査区のおよそ東半分に相当する第2南北街路の掘り下げ・撤去を主体とし、西半分の「大友氏館跡」領域内の遺構については最小限の掘り下げや確認に留めた。遺構の完掘を行った場所は第251図に示した地点で、他の地点では16世紀末葉以前の遺構あるいは遺構面の掘り下げを実施していない。

本調査区では、近年の造成工事に伴う客土が約20cm堆積しており、それを除去すると黒褐色を呈する旧表土が現れる。表土下は近世以降の水田層である。北壁土層（第253図）の検討によると、本調査地点では、標高4.5m付近で16世紀末葉から17世紀初頭の遺構面、標高4.4m付近で16世紀末葉頃の遺構面、標高4.3m付近の地山面で16世紀後葉から14世紀代の遺構面が存在し、都合3面の遺構面が確認できる。しかしながら、第2南北街路が砂質土と粘質土の互層による嵩上げによって複数回にわたる

路面を形成しており、その路面を切る形で大型柱穴や土坑が構築されるなど、地点によっては遺構が複雑に絡み合い、3面以上の遺構面が確認できる地点も存在していた。そのため、発掘調査の現場では遺構の切り合いと出土遺物との整合性を確認しながら、個々の遺構を慎重に掘り下げを進めてゆく作業を余儀なくされた。

本調査区で確認された遺構は、検出された遺構面と出土遺物の検討から、①16世紀末葉から17世紀初頭・②16世紀末葉・③16世紀後葉・④16世紀前葉から中葉・⑤14世紀の5つの時期に細別できる。16世紀前葉から中葉には、京都系土師器がまとまって廃棄される土坑が検出されるなど、本調査地点周辺が特異な儀式空間を形成していた可能性が考えられた。16世紀後葉には調査区の中央付近に堀が掘削され、武家地の区画遺構が構築された可能性がある。16世紀末葉になると、大友府内の基幹道路である第2南北街路が構築され、御所小路との交差点付近に木戸が設けられている。また、14世紀代には一辺約3mの方形掘方を有する性格不明の遺構や溝が検出されたが、これらが大友氏館の門や出入口等に相当する施設かどうかの確認はできなかった。なお、薄手の白色系（大内系）土師質土器や在地系の赤褐色を呈するロクロ目土師器などが主体的に出土する遺構は皆無で、15世紀代に比定される遺構は認められない。

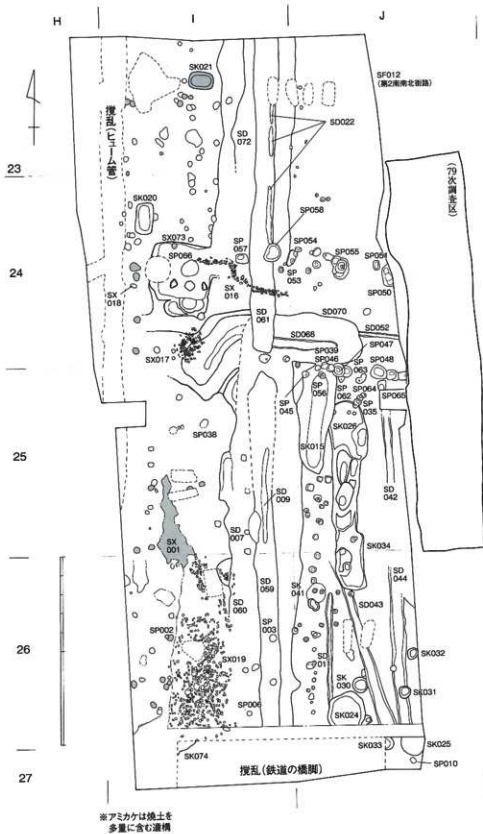
以下、遺構の詳細と出土遺物について、報告する。



第251図 完掘した遺構・地点(1/400)

遺構の時期の細別

15世紀代の遺構は皆無



第252図 第52次調査遺構配置図 (1/200)

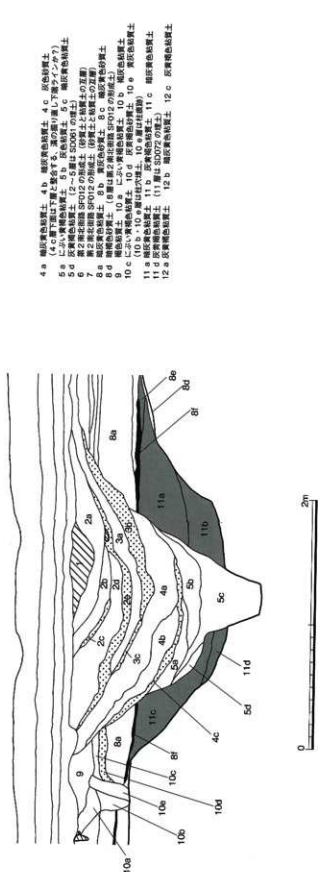
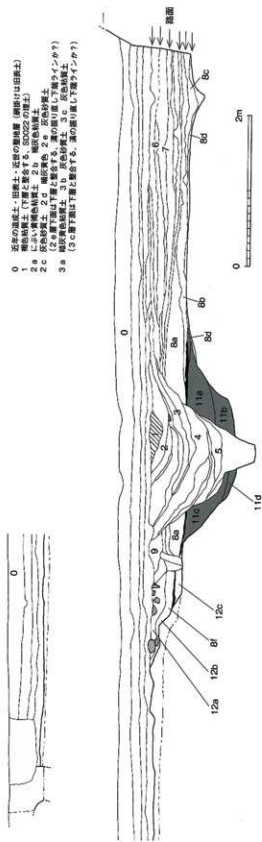
第7表 中世大友府内町跡第52次調査遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SX001	S001	整地層	I25～I26区	16世紀末葉	焼土を多量に含む	252
SP002	S002	柱穴	I26区	16世紀末葉～17世紀初頭	銅鏡出土・埋土に焼土	230
SP003	S003	柱穴	I26区	不明		
SP004	S004	柱穴	I26区	不明		
S005	S005	—	—	—		
SP006	S006	柱穴	I26区	16世紀末葉		
SP007	S007	柱穴	I25区	16世紀末葉		230
SP008	S008	柱穴	—	16世紀末葉～17世紀初頭		
SD009	S009	側溝	I25区	16世紀末葉～17世紀初頭	最終段階(?)の第2南北街路の側溝	226
SP010	S010	柱穴	I27区	不明		
SD011	S011	溝	J25～J26区	不明		
SF012	S012	道路	I-23～I-26区	16世紀末葉・16世紀末葉～17世紀初頭	第2南北街路	226
SP013	S013	柱穴	J25区	16世紀後葉	築地状遺構を構成する柱穴	
SP014	S014	柱穴	J25区	16世紀後葉	築地状遺構を構成する柱穴	
SK015	S015	土坑	J25区	16世紀後葉		244
SK016	S016	石列	I24区	16世紀末葉～17世紀初頭		227
SX017	S017	集石	I24区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SX018	S018	集石	I24区	16世紀末葉～17世紀初頭		229
SX019	S019	集石群	I26区	16世紀末葉～17世紀初頭	集石群の中に礎石あり	230
SK020	S020	土坑	I24区	16世紀後葉	土坑埋土の一部に砂・遺物少量	244
SK021	S021	土坑	I23区	16世紀末葉	埋土上位に焼土が堆積	244
SD022	S022	側溝	I23～I24区	16世紀末葉～17世紀初頭	最終段階(?)の第2南北街路の側溝	226
SK023	S023	土坑	J25～J26区	16世紀後葉	埋土は砂および砂質土	248
SK024	S024	土坑	J26区	16世紀後葉	京都系土師器細片出土。第2南北道跡下位で検出。街路形成土で埋められる。	248
SK025	S025	土坑	J26～J27区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器皿(1期)が一定量出土	253
SK026-1	S026-1	土坑	J25区	16世紀後葉		248
SK026-2	S026-2	土坑	J25区	16世紀後葉		248
SK026-3	S026-3	土坑	J25区	16世紀後葉		248
SK026-4	S026-4	土坑	J25区	16世紀後葉		248
SP027	S027	柱穴	I23区	不明		
SP028	S028	柱穴	I24区	不明		
SD029	S029	側溝	J26区	不明		
SK030	S030	土坑	J26区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器皿(1期)が多量に出土	253
SK031	S031	土坑	J26区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器皿(1期)が出土 最下層に白色粘土が堆積	255
SK032	S032	土坑	J26区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器皿(1期)が出土 最下層に白色粘土が堆積	255
SK033	S033	土坑	J26区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器皿(1期)が出土 最下層に白色粘土が堆積	255
SK034	S034	土坑	J26区	16世紀後葉		249
SP035	S035	柱穴	J25区	不明		
SP036	S036	柱穴	I24区	不明		
SP037	S037	柱穴	I24区	不明		
SP038	S038	柱穴	I25区	16世紀末葉		
SX039	S039	集石	J24～J25区	16世紀末葉	SP046上位に形成	250
S040	S040	—	—	—		

第8表 中世大友府内町跡第52次調査遺構一覧表②

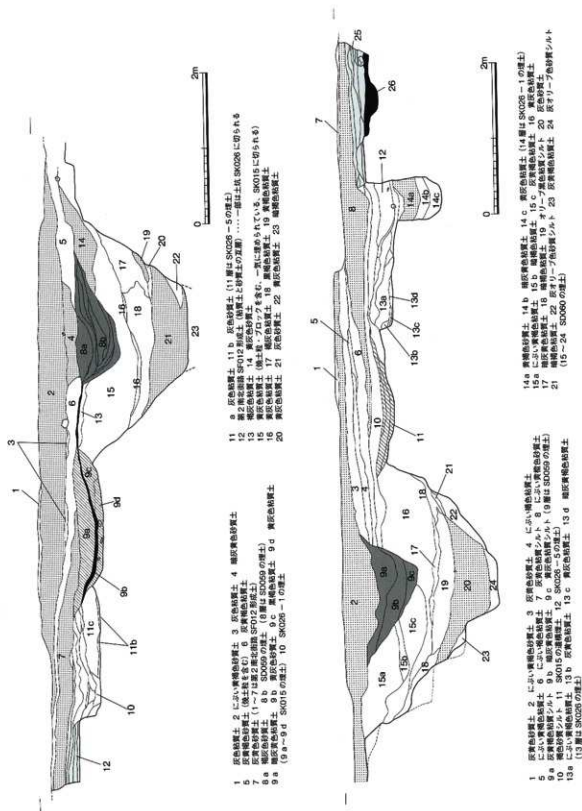
遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK041	S041	土坑	J26区	不明		
SD042	S042	溝	J25区	14世紀		263
SD043	S043	溝	J25区	14世紀?		263
SD044	S044	溝	J25区	14世紀		263
SP045	S045	柱穴	J25区	16世紀後葉	柱穴列を形成	250
SP046	S046	柱穴	J25区	16世紀末葉	大型柱穴列(南側)を構成	250
SP047	S047	柱穴	J25区	16世紀末葉	大型柱穴列(南側)を構成	250
SP048	S048	柱穴	J25区	16世紀末葉	大型柱穴列(南側)を構成	250
SP049	S049	柱穴	J23区	16世紀末葉		
SP050	S050	柱穴	J24区	16世紀末葉	大型柱穴列(北側)を構成	250
SP051	S051	柱穴	J24区	16世紀末葉	大型柱穴列(北側)を構成	250
SD052	S052	溝	J24区	14世紀?		263
SP053	S053	柱穴	J24区	16世紀末葉	大型柱穴列(北側)を構成	250
SP054	S054	柱穴	J24区	16世紀末葉	大型柱穴列(北側)を構成	250
SP055	S055	柱穴	J24区	16世紀末葉	大型柱穴列(北側)を構成	250
SP056	S056	柱穴	J25区	16世紀後葉	柱穴列を形成	250
SP057	S057	柱穴	J24区	16世紀末葉	大型柱穴列(北側)を形成	250
SP058	S058	柱穴	J24区	16世紀末葉	大型柱穴列(北側)を構成	250
SD059	S059	溝	I25～I26区	16世紀後葉		238
SD060	S060	溝	I24～I26区	16世紀後葉		238
SD061	S061	溝	I23～I24区	16世紀後葉		240
SP062	S062	柱穴	J25区	16世紀後葉	柱穴列を形成	250
SP063	S063	柱穴	J25区	16世紀後葉		
SP064	S064	柱穴	J25区	16世紀後葉	柱穴列を形成	250
SP065	S065	柱穴	J25区	16世紀後葉	柱穴列を形成	250
SP066	S066	柱穴	I24区	16世紀末葉～17世紀初葉	焼土を多量に含む	230
SP067	S067	柱穴	I24～I25区	16世紀末葉		
SD068	S068	溝	J24区	16世紀末葉		241
SD069	S069	溝状遺構	I24～I25区	14世紀		261
SD070	S070	溝	I24～J24区	16世紀後葉		241
SK071	S071	土坑	I25区			
SD072	S072	溝	I23～I24区	16世紀後葉		243
SK073	S073	不明遺構	I24区	14世紀		262
S074	S074	土坑	I27区	14世紀	真好女一括資料	256





第253図 調査区北壁土層実測図 (1/50・1/30)





第254図 調査区土層実測図 (1/50)

(2) 16世紀末葉～17世紀初頭の遺構・遺物 (第255図)

概要 16世紀末葉から17世紀初頭に比定される遺構は、道路遺構(第2南北街路)1、道路側溝2、石列1、集石遺構3、柱穴列、柱穴多数である。これらの遺構は検出層位や出土遺物から16世紀末葉から17世紀初頭に比定され、島津侵攻の天正16年(1586)以降の遺構群であろうと思われる。当該段階に属する遺構には埋土に焼土を含む柱穴や礎石が廃棄された集石があり、島津侵攻を契機として、大友氏館跡が大きな被害を受けたか機能停止した状況を示しているものと推定される。なお、調査区の西半分は国指定史跡大友氏遺跡の指定領域に予定されており、特にI26～I27区については、当該段階で確認された遺構を現状保存し、それより以下の掘り下げを行っていない。

以下、遺構の詳細を報告する。

SF012・SD009・SD022(第252図)

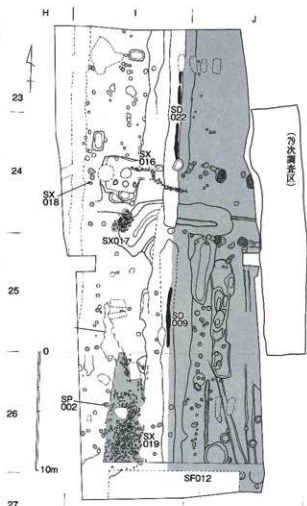
SF012はJ23区～J27区に位置する道路遺構で、中世府内の基幹道路である第2南北街路に相当する遺構である。本調査区で確認された

SF012の状況は、次項で詳細を報告したいが、道路形成土中に肥前系陶器(唐津焼)Ⅲ(第264図1)が包含されていることから、少なくとも近世初頭までは当該道路が使用されていた可能性が高い。また、J24・J25区に位置する大型柱穴列の一部についても、当該段階までで続していた可能性が考えられる。これについても、記述の都合上、次項で詳細を報告したい。

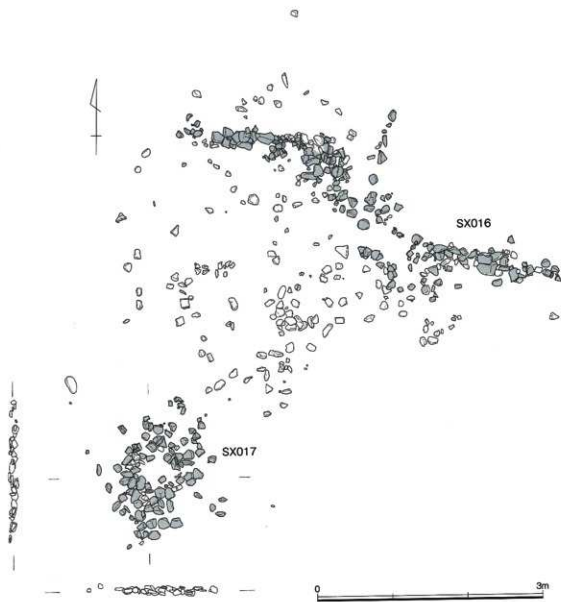
肥前系陶器  
(唐津焼)  
の出土

道路側溝

SD009・SD022は当該段階における第2南北街路に付属する道路側溝である。SD009はI25・26区に位置し、その規模は長さ5.0m、幅0.25m、深さ0.1mを測る。第2南北街路構築当初の道路側溝SD061の規模が縮小され、掘り直された遺構と推定される。SD022はI23・I24区に位置し、その規模は長さ7.4m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。これも第2南北街路構築当初の道路側溝SD059やSD061の規模が縮小され、掘り直された遺構と推定される。SD009・SD022からは、図示できるような遺物は出土していない。



第255図 16世紀末葉～17世紀初頭の遺構 (1/300)



第256図 SX016・SX017実測図(1/50)

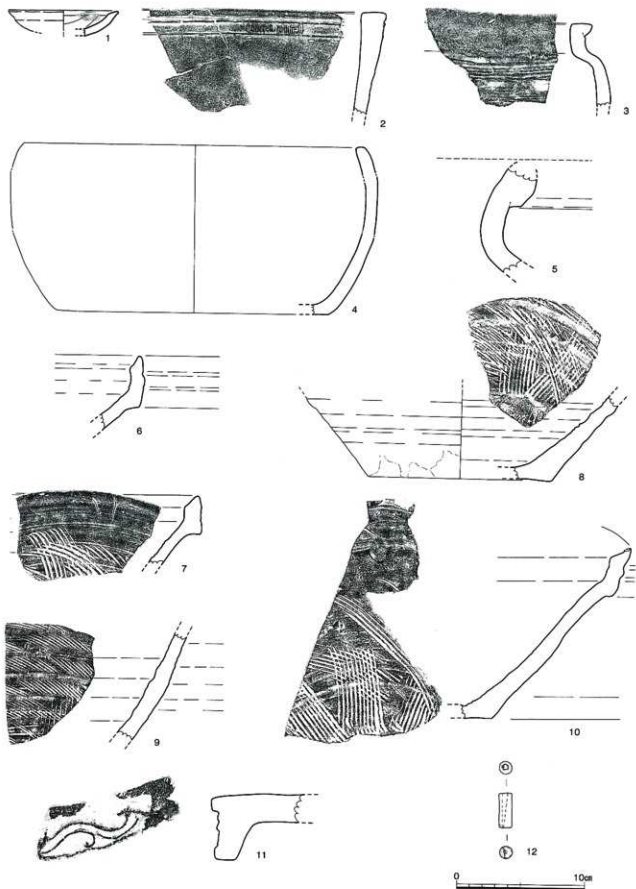
石列

SX016 (第256図) 124区に位置する石列で、拳大の礫で鍵の手状に屈曲する石列を構成する遺構である。遺構の規模は東西5.1m、南北2.5mを測り、礫を2～3段程度積み上げている。建造物の基礎や建物の領域を示す遺構であった可能性を検討したが、遺構の性格は不明である。石列内部やその周辺から、第257図で図示した遺物が出土した。

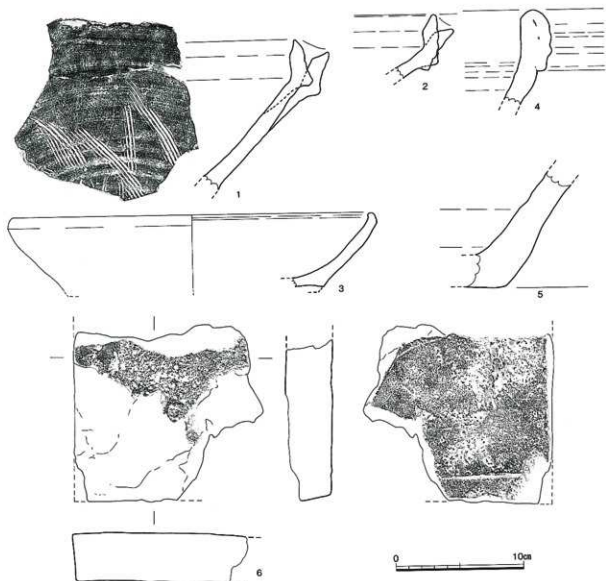
遺構の  
性格不明

SX016出土遺物 (第257図) 1は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以上を測る埴路編年2期ないし3期に比定される資料である。2は在地産の瓦質土器火鉢で、口縁部外面に2条の突帯と突帯間に二連雷文の刻印(スタンプ)を押捺する。3も在地産の瓦質土器火鉢で、胴部内面には刷毛状工具による調整が認められる。4は瓦質土器鉢で、内外面ともナデ調整を施す。5は備前系陶器甕の口縁部である。6～10は備前系陶器播鉢で、いずれも乗岡編年近世1期に比定される資料である。11は軒平瓦で、中心飾りを欠損するものの、宝珠文均整唐草文軒平瓦と推定される。12は碧玉を素材とする管玉で、片面穿孔による貫通穴を有する。古墳時代の所産で、混入品である。

管玉  
(混入)



第257図 SX016出土遺物実測図(1/3)



第258図 SX017出土遺物実測図(1/3)

## 集石遺構

SX017(第256図) I24区に位置する集石遺構である。南北1.5m、東西1.2mの範囲に拳大の礫が散布する。中央部には礫の散布がないが、その部位に柱穴状の掘り込みなどは認められなかった。遺構の性格は不明である。層位と出土遺物から、16世紀末葉から17世紀初頭の遺構と考えられる。

SX017出土遺物(第258図) 1・2は備前系陶器摺鉢で、乗岡編年近世1期に比定される資料である。3は備前系陶器の鉢である。4は備前系陶器甕の口縁部で、口縁外面に凹線を施す。近世1期比定される資料である。5は備前系陶器甕の底部破片である。6は埴の破片である。

## 玉砂利の集中

SX018(第259図) I24区に位置する集石遺構である。東西40cm、南北30cmの範囲に小型の礫や玉砂利が集中していた。集石の周囲には掘り込みなどの痕跡は認められない。土器小片も少数混在するが、14世紀代の土師質土器と思われ、混入品であろう。検出面の高さや出土層位から、16世紀末葉から17世紀初頭の遺構と判断される。図示できるような出土遺物は認められなかった。当該遺構は発掘調査の過程で撤去は行わず、現状保存するため、埋め戻している。

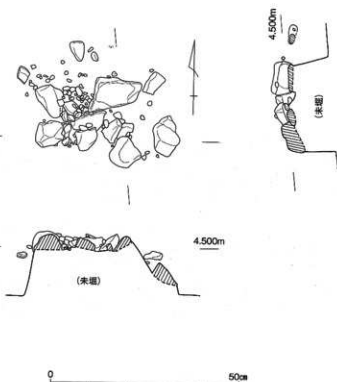
集石遺構

SX019 (第260図) I24区に位置する大規模な集石遺構である。南北約9.0m、東西約3.0mの範囲に頭大から拳代の礫が集中する。16世紀後葉に比定される堀SD060と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD060→SX018となる。集石遺構は攪乱により、2箇所で破壊を受けている。遺構の南側では礎石として使用されていたと推定される大型の礫が、少なくとも4個廃棄されていた(写真図版8参照)。礎石や礫の中には、二次的な被熱を受けているものが存在し、集石内に堆積する埋土中には少量の焼土が認められた。遺構の位置と集石の状態から、これらの礎石は本来大友氏館跡で使用されていたものが、天正14年(1586)の高津侵攻により廃絶し、その後廃棄されたと推定される。また、礎石の他に宝篋印塔の笠部の破片も認められた。当該遺構が位置する地点は国指定史跡大友氏遺跡の指定領域に予定されており、遺構上位に分布する遺物を回収したほかは、これ以上の掘り下げを行わず、現状保存のため埋め戻している。

礎石4個が廃棄

宝篋印塔笠部

掘り下げを行わず埋め戻し



第259図 SX018実測図(1/10)

SX019出土遺物(第261図) 1~3は京都系土師器皿である。このうち、1・3は器壁の厚みが5mm前後、2は5mm以上となり、前者は塩路編年2期で16世紀後葉、後者は塩路編年3期で16世紀末葉に比定される資料である。4・5は在地系の瓦質土器火鉢の口縁部で、4の口縁部外面には刺突文による退化した梅花文が施されている。胴部内面には刷毛状工具による調整が認められる。6も在地系の瓦質土器火鉢の底部破片で、脚部が残存する。内面には刷毛状工具による調整が施されている。4~6は16世紀後葉以降の所産である。7は中国産陶器小壺の底部で、外面の一部に褐釉を施し、底部外面付近は露胎となる。残存部が少ないため断定できないが、底部外面に左回転の糸切り痕があると思われる。胎土は精良で、黒灰褐色を呈する。中国産茶入の底部と断定できる資料である。14~16世紀代に中国南部で生産された褐釉陶器と推定される。8は備前系陶器播鉢で、乗岡編年近世1期(16世紀末葉)に比定される。9は備前系陶器大甕の口縁部で、口縁外面に凹線を施すことから、これも近世1期に比定される資料である。10・11は備前系陶器大甕の底部である。

中国産茶入

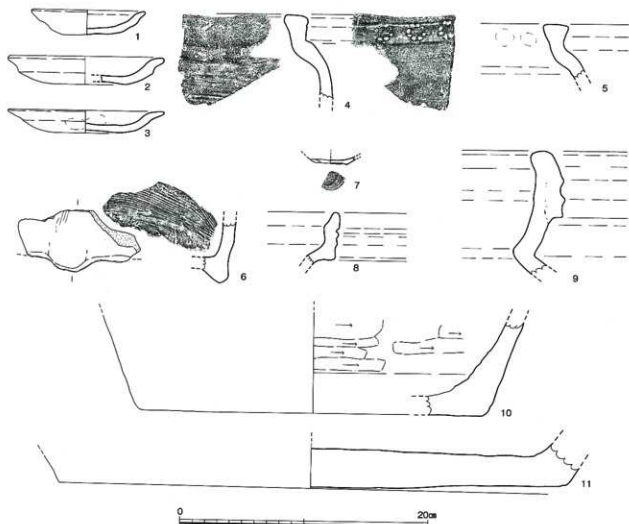
埋土に多量の焼土を含む

柱穴 I23~I25区で検出された柱穴の中で、埋土に多量の焼土を含むものは、当該段階に位置づけられる遺構である。また、I25・I26区は16世紀末から17世紀初頭の遺構面以下の掘り下げを行っていないため、この地点の柱穴はすべて当該段階に位置づけられる遺構と推定される。遺物が出土した柱穴SP002・SP007・SP066の3つで、SP002とSP066は埋土に多量の焼土を含んでいた。



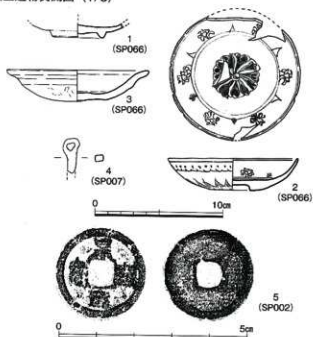
第260図 SX019実測図 (1/60)



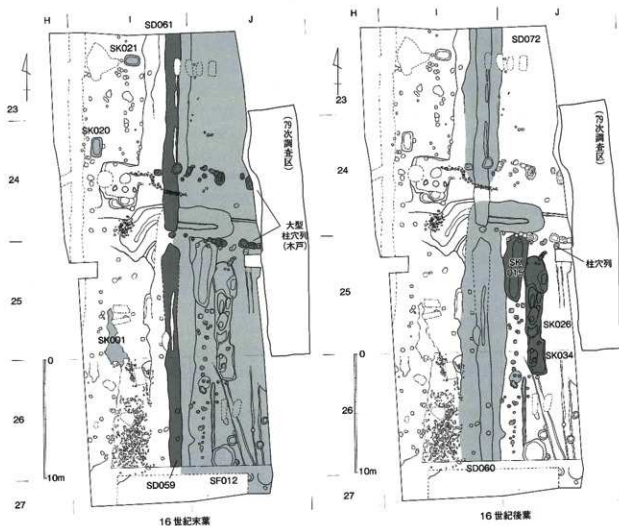


第261図 SX019出土遺物実測図(1/3)

柱穴出土遺物(第262図) 1~3は  
 SP066の出土遺物で、1は中国産の青磁碗  
 の底部である。2は中国景德鎮窯系青花皿  
 で、底部は萁筒底を呈する。小野分類のC  
 群である。2は京都系土師器皿である。器  
 壁の厚みは5mm前後で、口縁部周辺に強い  
 ナアを施し、胴部外面には指頭痕が認め  
 られる。塩路編年2期の製品である。4  
 はSP007の出土遺物で、器種不明の鉄器  
 の破片である。5はSP002の出土遺物で、  
 中国北宋代の銅錢「皇宋通寶」(初鑄造年  
 1038)である。



第262図 柱穴出土遺物実測図(1/3・1/1)



第263図 16世紀末葉・16世紀後葉の遺構 (1/300)

## (3) 16世紀後葉・16世紀末葉の遺構・遺物 (第263図)

**概要** 16世紀後葉および16世紀末葉に比定される遺構は、道路遺構(第2南北街路)1、溝または堀5、土坑5、柱穴列3・柱穴多数・その他の遺構である。これらの遺構は時期的に連続するものが認められることや切り合い関係を有するものが多いため、説明の都合上、本項目で一括して報告する。16世紀後葉の遺構群は屋敷(武家地)に関わるもので、16世紀末葉になると屋敷の遺構群は機能を停止し、これらを埋める形で第2南北街路が構築される。従って、16世紀末葉に大きな画期を認めることになるが、遺構の解釈については「小結」の項目に譲り、まずはそれぞれの遺構の詳細を報告したい。

第2南北  
街路  
10m近い  
幅員

SF012(第263図) J23区～J27区に位置する道路遺構で、中世府内の基幹道路である第2南北街路に相当する遺構である。調査区の制限から幅は不明であるが、現状で最大7.8mを測り、10m近い幅員を有する道路遺構であった可能性が高い。調査区土層(第253・254図)の観察によると、砂質土と粘質土を交互に積み上げ、その上面に硬化面を形成する。硬化面は少なくとも6面が認められ、遺構の存続期間に6回以上の改修が行われていたことが確認できる。底面付近の硬化面は粘質土が板

路面上で  
火を焚いた  
痕跡

存続時期  
1570~1600  
年代

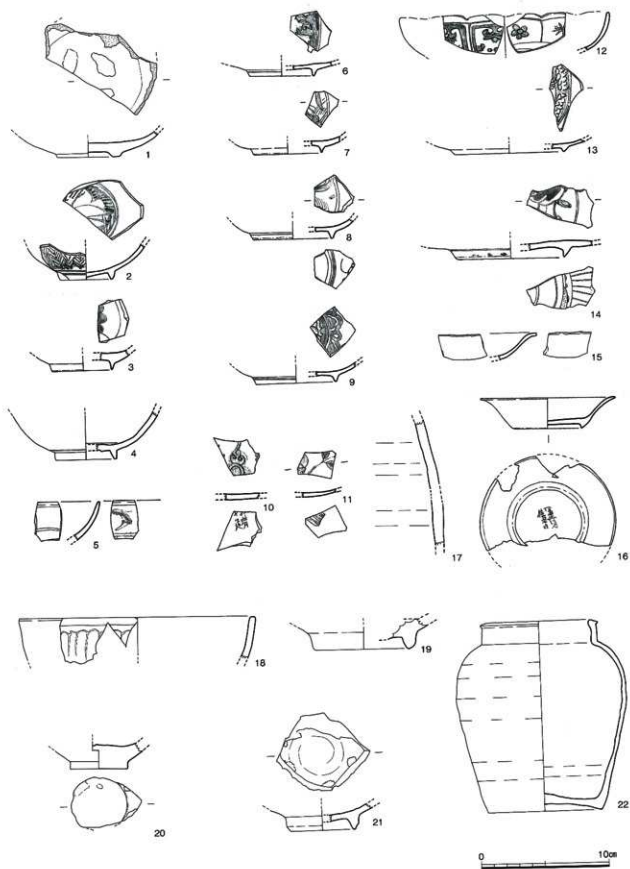
唐津焼  
第2南北  
街路存続  
時期の  
下限を  
示す

焼土や  
炭化物が  
集中する  
部位から  
の出土遺物

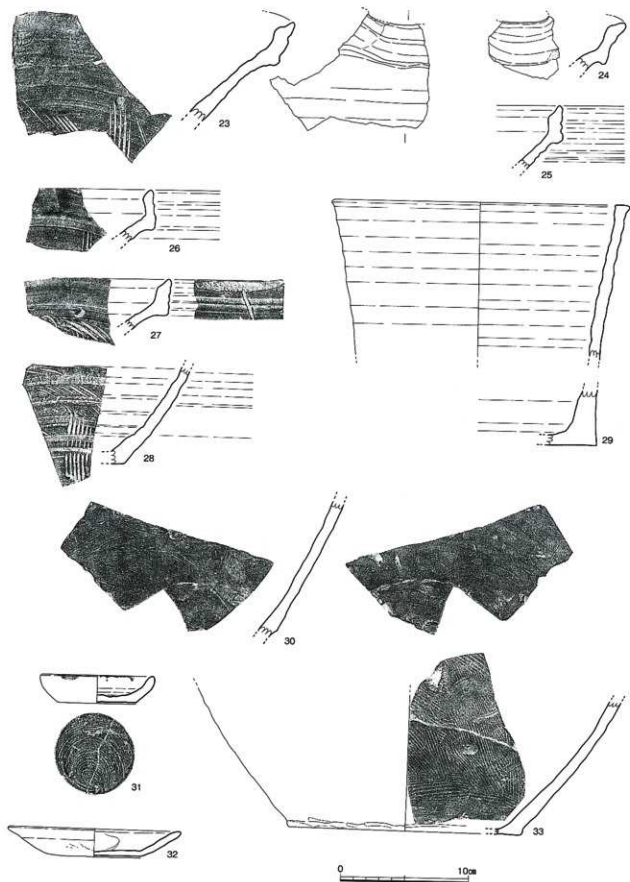
状に剥離するほどの強い硬化が認められた(写真図版10)。また、J26区上位の路面上には焼土や炭化物が集中している地点が認められ、完形品である在地系の土師質土器の皿1枚(第265図31)が出土した。路面上で火などを焚いた痕跡である可能性が考えられる(写真図版10)。

第2南北街路の存続時期幅についてふれた。構築時期であるが、道路を形成する整地層からはそれを示す良好な遺物は出土していない。しかしながら、第2南北街路の構築によって完全にパッキングされた土坑(SK015・SK023・SK024・SK026・SK034など)から、堀路幅年2期以降の京都系土師器が出土しており、これらの遺物の年代観を参照すると、街路構築の初現は16世紀後葉を遡らないことになる。また、街路の廃絶時期については、道路を形成する整地層の上位から砂目積みみの唐津焼が出土していることから、17世紀初頭頃に比定できるであろう。以上、今回の調査や過去の調査での所見や文献史料等での研究成果を総合すると、街路の存続期間はおおむね1570～1600年代前後に絞り込める可能性が考えられる。また、後述するSD059・SD061は街路東側の道路側溝として機能しており、さらに大型柱穴で構成される柱穴列は、「木戸」等の道路上に構築された構造物である可能性が高い。

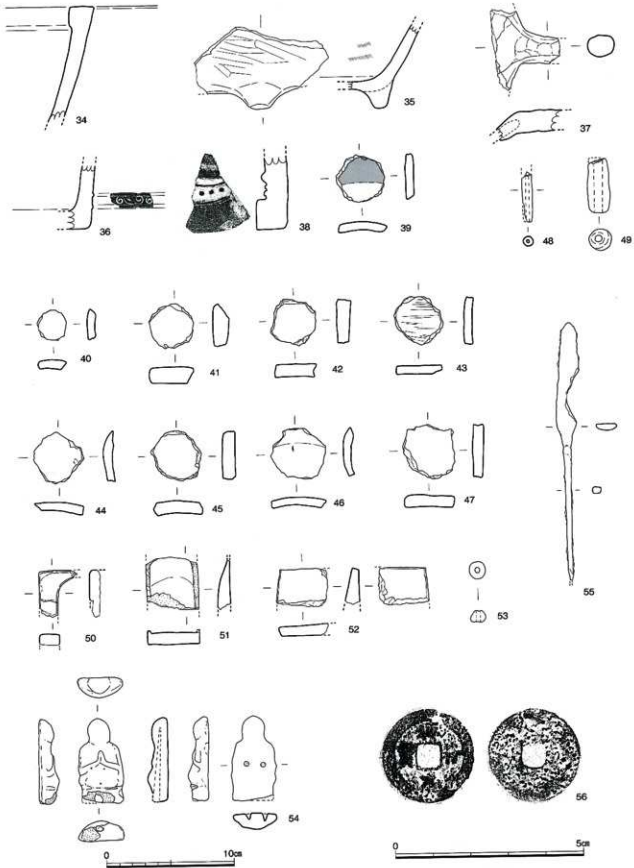
SF012出土遺物(第264～266図) 第264図1は肥前系陶器(唐津焼)皿で、内外面に灰釉を施し、内底部と底部外面付近は露胎となる。見込みには砂目積みが認められる。1600～1630年代の所産である。近世初頭に比定できる製品で、第2南北街路存続時期の下限を示す遺物と考えられる。2は中国景德鎮窯系青花碗で、小野正敏分類のC群に比定される資料である。3・4も中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類のD群に比定される。5～11は中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類のD群に属する。12も中国景德鎮窯系青花皿で、口縁部が輪花となる。13は中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類D群ないしF群に属する資料である。14も中国景德鎮窯系青花皿で、外面には銘文を有する。小野分類F群に比定される資料である可能性が高い。15・16は中国景德鎮窯系の白磁皿で、森田分類E群に属する資料である。16の内底部には青花による「富貴佳器」銘が認められる。17は中国産褐釉陶器の胴部破片である。内面は露胎となる。18は中国龍泉窯系青磁細頸弁文碗である。15世紀後葉から16世紀前葉の所産である。19は中国産青磁碗の底部破片である。20は中国龍泉窯系青磁香炉の底部で、胴部外面に脚部が剥離した痕跡が認められる。内外面ともに青磁釉が施されており、底部外面にも施軸されている。21は中国産褐釉陶器の小型壺で、外面と底部に褐釉を施し、内面は露胎となる。22は白磁碗で、見込みに目積みの痕跡が認められることから、朝鮮王朝産の白磁製品と推定される。第265図23～28は備前系陶器摺鉢で、いずれも乗間幅年の近世1期に比定される製品である。29は備前系陶器深鉢である。水指あるいは建水などの茶道具としても使用できそうな製品である。30は備前系陶器甕の胴部下位の破片で、内面に刷毛状工具による調整痕、外面に削りまたはナデの痕跡が認められる。31は在地系の土師質土器小皿で、色調は赤褐色を呈し、内面にはロクロ目、底部には右回転の糸切り痕が認められる。口縁端部にススの付着がみられる。J26区の第2南北街路上位に堆積する焼土や炭化物が集中する部位からの出土遺物である。22は京都系土師器皿で、器の厚みは5mm程度を測る。16世紀前葉から中頃の所産である。33は瓦質土器大甕の底部付近の破片で、外面にはナデ、内面には刷毛状工具による調整痕が認められる。第266図34～36は瓦質土器で、いずれも16世紀後葉以降に比定される在地系の製品である。34は鉢の口縁部で、口縁端面は肥厚し、断面形態は方形を呈する。内外面ともナデ調整が行われている。35は火鉢の底部付近の破片で、板状の脚部が付属する。内面にはナデ、外面には削り状の調整が認められる。36も火鉢の底部付近の破片で、外面には2条の突帯を有し、突帯間に双頭鎌手文を刻印する。37は把手付鍋あるいは鉢の破片で、把手の付け根の部位に相当する。38は巴文軒丸瓦当部の破片である。39～47は陶器あるいは土器片加工品である。39の外面の上半部と内面には灰釉が施されており、瀬戸美濃産の天目碗を再加工したものと想われる。40は土師質土器、41～47は瓦質土器の破片を利用した土器片加工品である。



第264図 SF012出土遺物実測図①(1/3)



第265図 SF012出土遺物実測図② (1/3)



第266図 SF012出土遺物実測図②(1/3・1/1)

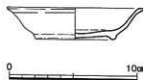
土人形  
(土製仏像)  
…近世以降

48・49は土鍾である。50・51は硯で、いずれも輝緑凝灰岩製の製品（赤間硯）である。52は頁岩を素材とする小型の砥石である。53はガラス小玉である。54は道路形成層上位から出土（写真図版10参照）した土人形で、欠損や磨滅が著しいものの、胸の前で合掌する仏像を象つたものである。型合わせて製作されており、雌雄の合わせ目の部位で剥離している。表面には刺突痕が2箇所認められ、ヒゴなどを刺して使用した痕跡と思われる。このような特徴をもつ土人形は中世段階までの所産ではなく、江戸時代中期以降の製作になる可能性が高い。従って、道路遺構（第2南北街路）と直接関連する遺物ではなく、混入品と考えられる。56は銅銭で、磨滅と錆出が著しいもの、中国北宋代の「祥符元寶」（初铸年代1009年）と思われる。

大友氏館跡の東側境界ラインと重複

SD059 I25～I27区に位置する溝で、その規模は長さ12.6m、幅0.8m、深さ0.5mである。堀SD060を切って構築されており、南側は大規模な攪乱によって破壊されている。北側4.3mのみを完掘し、南側は保存のため掘り下げを行っていない。I25区で溝の北端部を検出している。第2南北街路SF012を切って構築されており、街路に付属する側溝であった可能性が高い。また、遺構の位置は大友氏館跡の東側の想定境界ラインと重複しており、その意味でも注目される遺構である。出土遺物は少ないが、遺構の切り合い関係や出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は16世紀末葉に比定される。

SD059出土遺物（第267図） 図示した遺物は、中国産の白磁皿である。森田分類のE群に属する。15世紀後半から16世紀の所産である。



第267図 SD059出土遺物実測図(1/3)

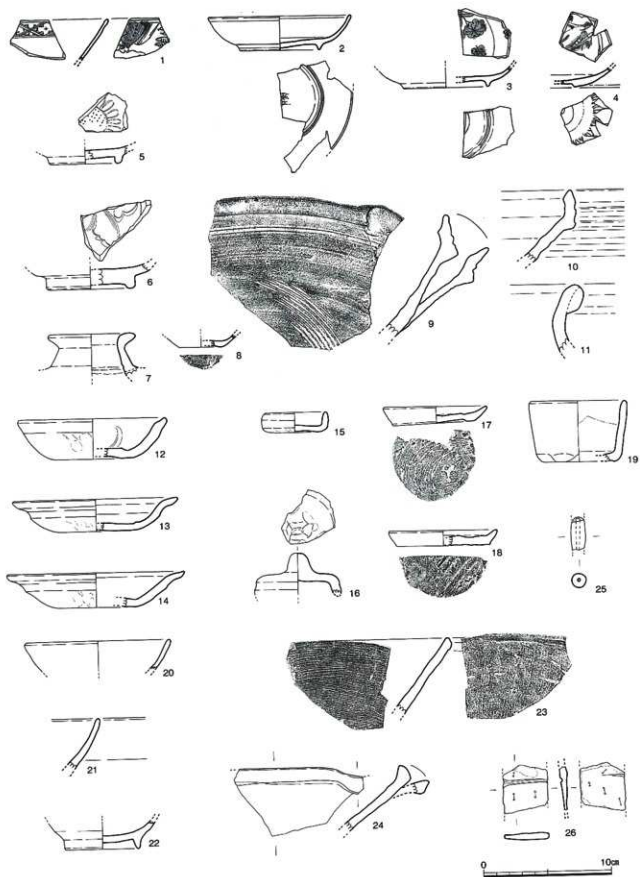
SD060 I24～I27区に位置する堀で、その規模は長さ14.6m、幅2.5m、深さ1.2mである。16世紀末葉の溝SD059・SD061に切られており、南側は大規模な攪乱によって破壊されている。また、16世紀後葉の土坑SK015に切られている。I24区で東側に屈曲し、SD070と接続する。北側6.2mのみを完掘し、南側は保存のため掘り下げを行っていない。土層図（第254図）の検討によると、数度の掘り直しが認められるようであり、堀の機能時の滞水状況を示すと思われる土層や意図的な埋設土層等が堆積していた。また、SD060の上位には第2南北街路SF012の形成土が堆積しており、街路の構築によって完全にバックされていることが確認されている。遺構の年代は切り合い関係などから、第2南北街路構築以前の16世紀後葉に通ると推定されるが、堀の埋土中から京都系土師器の深手の坏（第268図12）も出土しており、街路構築直前まで堀が機能していたと推定される。

中国産  
茶入

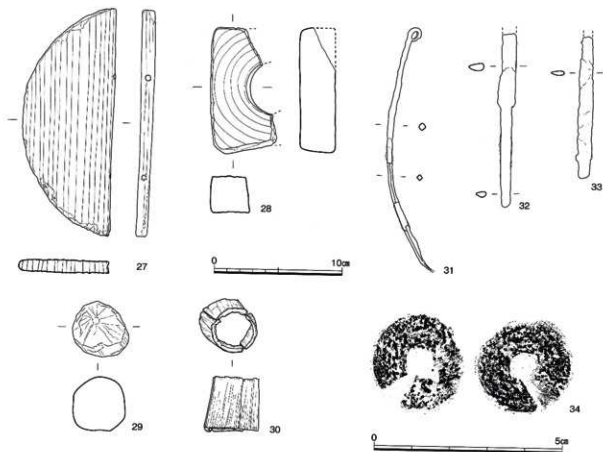
深手の坏

SD060出土遺物（第268・269図） 第268図1～4は中国景德鎮窯系青花で、1はE群碗、2・3はE群皿、4はC群皿である。5は中国産の青磁碗の底部で、見込みには印花による花文を有する。6は中国龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みには劃花文による花文が認められる。7は中国黒釉陶器壺の口縁部で、外面に黒釉を施し、内面は露胎となる。8は中国産陶器の茶入で、小破片であるが、外面に褐釉、底部外面に糸切り痕が認められる。9～11は備前系陶器で、9・10は乗岡編年近世1期に比定される搦鉢、11は大甕の口縁部である。12～14は京都系土師器で、12は深手の坏、14は皿である。なお、12はSD060出土の土師質土器で最も新しい様相をもつものであるが、混入ではなく、確実に遺構埋土中からの出土であることを確認している。15は土師質土器小皿または蓋である。16は土師質土器の蓋で、天井部にツマミを有する。17・18は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕を有する。14世紀代の製品で、混入品である。19は中国産の青磁香炉で、胴部内面中位以下が露胎となる。脚部は著しく退化している。20～22は在地系の瓦質土器塊である。23は瓦質土器鉢、24





第268図 SD060 出土遺物実測図① (1/3)



第269図 SD060出土遺物実測図② (1/3・1/1)

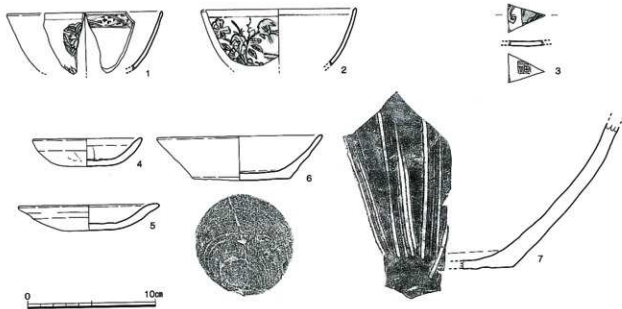
は東播系須恵質土器捏練で、いずれも14世紀代の製品であることから、混入品と考えられる。25は土錘の破片である。26は粘板岩を素材とする砥石で、表面に1条の条線が認められる。第269図27～30は木製品あるいは竹製品である。27は曲物底板で、側面には2箇所木釘が打たれていた痕跡が認められる。28は平面形態が方形で、中央部に貫通穴を有するものであるが、用途は不明である。29は穂杖の球である。30は竹製筒状製品で、竹を輪切りにしたものである。出土直後はしっかりした円筒状を呈していたが、器壁が約3mmと薄いためか、取り上げ後に若干の変形が認められた。31～33は鉄製品で、いずれも用途不明である。34は銅銭で、鋳出が著しく、銭文は不明である。

竹製筒状  
製品

SD061 I23～I24区に位置する溝で、その規模は長さ11.1m、幅0.8m、深さ1.0mである。堀SD072を切って構築されており、遺構の切り合い関係はSD072(古)→SD061(新)である。土層観察のため、北壁に接するトレンチ部分を掘り下げた他は、遺構の保存のため掘り下げを行っていない。I24区では溝の南端部を検出した。第2南北街路SF012を切って構築されており、既に記したSD059と同様、街路に付属する側溝であった可能性が高い。また、遺構の位置についてもSD059と同様、大友氏館跡の東側の想定境界ラインと重複していることが注意される。出土遺物や切り合い関係から、遺構の構築年代は16世紀末葉に比定される。

第2南北  
街路の  
側溝

SD061出土遺物(第270図) 1・2は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類E群碗である。3は中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類E群皿に分類される。内底部に「福」字の裏底銘がある。4・5は京都系土師器皿で、塩路福年2期の製品である。6は土師質土器坏で、底部外面に糸切り痕が認められる。14～15世紀代の製品で、混入品と断定できるものである。7は瓦質土器拵鉢の胴部片である。



第270図 SD061 出土遺物実測図 (1/3)

性格不明

SD068 (第272図) I24～J24区に位置する溝で、その規模は長さ2.2m、幅0.3m、深さ0.15mである。16世紀末葉の溝SD061および16世紀後葉の堀SD070と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は(古)SD070→SD068→SD072(新)となる。溝の規模は小規模で、その性格は不明である。埋土中から青磁碗の破片が出土しているが、遺構の詳細な構築年代を示唆するものではない。遺構の年代は、切り合い関係などから、16世紀末葉前後に比定される。

SD068出土遺物(第271図) 図示した遺物は、中国龍泉窯系青磁細蓮弁文碗である。15世紀後半から16世紀前半の所産である。



第271図 SD068 出土遺物実測図(1/3)

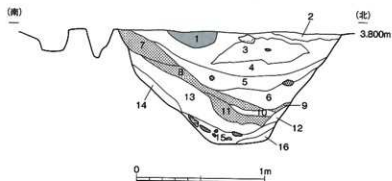
SD070 (第272図) I24～J24区に位置する堀で、その規模は長さ4.4m、幅1.7m、深さ0.9mである。16世紀末葉に比定される溝SD061および大型柱穴によって構成される柱穴列に切られている。堀SD070はSD060と接続し、

深手の坏

南側へ屈曲する。土層図の検討によると、数度の掘り直しが認められるようである。また、SD070の上位には第2南北街路SF012の形成土が堆積しており、街路の構築によって完全にバックされている。このような状況はSD060と同様で、SD070とSD060は同一の遺構であることを傍証している。また、堀の埋土から京都系土師器の深手の坏(第273図2)が出土しており、遺構の存続年代は16世紀後葉から末葉に比定される。

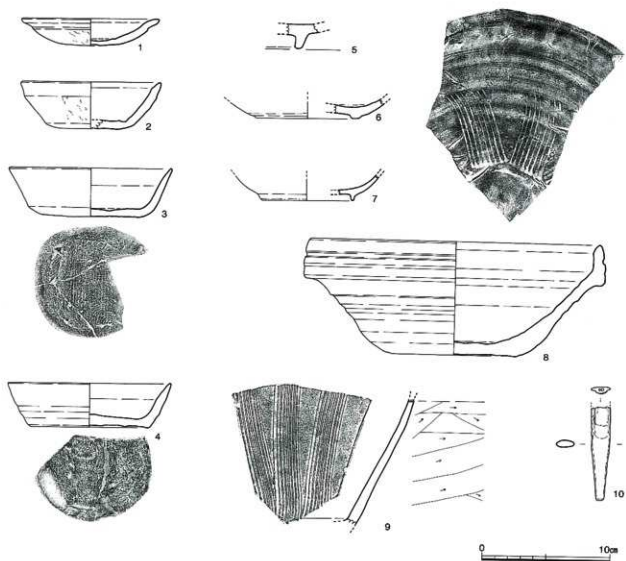
SD070出土遺物(第273図) 1・2は京都系土師器で、1は皿、2は深手の坏である。なお、2はSD070の出土遺物の中で最も新しい様相をもつものであるが、混入ではなく、確実に遺構埋土中からの出土であることを確認している。3・4は土師質土器坏で、3は底部外面に糸切り痕と板状圧痕、4は糸切り痕のみが認められる。5は瓦質土器鉢の底部で、高台部の小破片である。6は中国南部産の白磁皿の底部で、高台の断面形態が逆台形を呈する。7も中国産の白磁皿の底部で、森田分類E群に分類される。8は備前系陶器摺鉢で、乗岡編年中世6期に属する製品である。9は瓦質土器摺鉢の胴部で、内面に10条を1単位とする摺目が認められる。10は青銅製葺の破片である。

第3節 中世大友府内町跡第52次調査

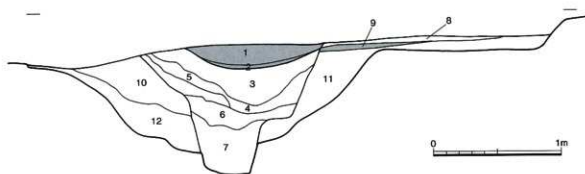


- 1 褐色粘質土 (SD068の埋土、下層と完全に整合する) 2 灰黄褐色粘質土 3 褐色粘質土ブロック (黄褐色のブロック)  
 4 濃い黄褐色粘質土 5 黄灰色粘質シルト 6 褐色粘質シルト 7 暗灰色粘質土 8 黄灰色粘質土 9 黄灰色粘質土  
 10 褐色粘質土 11 灰色粘質土 12 黄灰色粘質土 13 灰黄褐色粘質シルト 14 灰褐色粘質土 15 褐色粘質シルト  
 16 褐色粘質土 (2~16はSD070の埋土)

第272図 SD068・SD070土層実測図 (1/30)



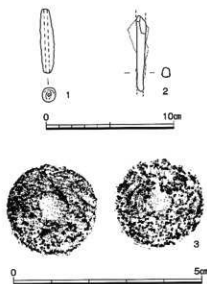
第273図 SD070出土遺物実測図 (1/3)



- 1 黄褐色粘質土 2 灰色粘質土（下部にシルト層が堆積する。SD061の掘り直しの下層ライン）  
 3 暗灰黄色粘質土 4 暗灰黄色粘質土 5 灰色粘質土 6 灰色粘質土 7 暗灰黄色粘質土（1～7はSD070の埋土）  
 8 深い青灰色粘質土 9 灰黄色粘質土（最下部の第2南北街路形成層の土）（8・9は第2南北街路SF012形成土）  
 10 青灰色粘質土 11 灰黄色粘質土 12 暗灰色（10～12はSD070の埋土）

第274図 SD061・SD072土層実測図（1/30）

SD072（第274図）I23～I24区に位置する掘で、その規模は長さ9.0m、幅2.2m、深さ0.8mである。堆積土層の観察のため、調査区北壁に設定したトレンチと遺構の広がりを確認するため、I24区に設けたサブトレンチで掘り下げを行った他は、遺構の保存のために完掘していない。遺構の検出状況とサブトレンチでの検討の結果、堀の南端部を確認した。第253図および第274図で提示した土層図によると、SD072の上位には第2南北街路SF012の最も下位の路面形成土が堆積しており、街路の構築によって完全にバックされていることを確認している。また、16世紀末葉に構築された溝SD061によって切られていることも、明瞭に確認できる。発掘面積が僅少であるため、出土遺物は少なく、構築時期



第275図 SD072出土遺物（1/3・1/1）

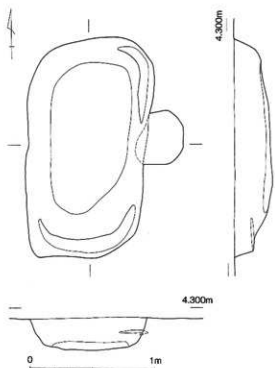
を示唆する良好な資料は認められない。しかしながら、遺構構築の年代は、切り合い関係などから、第2南北街路構築以前の16世紀後葉に遡ると推定している。なお、遺構の存続時期や遺構の切り合い関係の様相などはSD060のそれと類似しており、SD060とSD072は同時併存していたと推定される。

SD072出土遺物（第275図）1は土錘で、完存品である。2は鉄製品の破片で、器種・用途は不明である。3は銅銭で、鋳出が著しく、銭文の判読は困難である。

SD060と  
SD072は  
同時併存

SK020 (第276図) I23区に位置する土坑である。遺構の位置は、国指定史跡大友氏館跡の領域内となる。平面形態は略隅丸方形を呈し、その規模は長径1.7m、短径0.95m、深さ0.25mである。遺構の主軸方向はほぼ正南北となる。東側に隣接する柱穴と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は、柱穴→SK023である。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑であろうか。遺構内部からは、図示できるような出土遺物は認められなかった。遺構の詳細な構築時期は不明であるが、周辺の状況から16世紀後葉から末葉の所産と推定される。

廃棄土坑



第276図 SK020実測図(1/30)

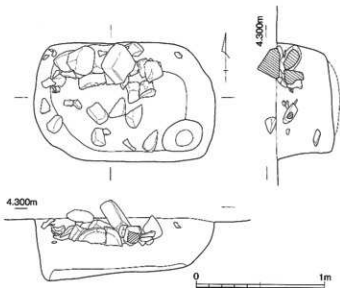
SK021 (第277図) I24区に位置する土坑である。当該遺構の位置も、国指定史跡大友氏館跡の領域内となる。平面形態は略隅丸方形を呈し、そ

埋土上位に  
焼土が堆積

の規模は長径1.4m、短径0.95m、深さ0.5mである。遺構の主軸方向はほぼ正東西となる。埋土上位に多量の焼土が堆積し、その部位に石臼や茶臼、中国産青花碗などが集中していた。遺構埋土の状況と出土遺物の年代観から、火災処理に伴う廃棄土坑と推定され、焼土形成の契機としては天正14年(1586)12月の島津侵攻の可能性が考えられる。16世紀末葉に比定できる遺構である。

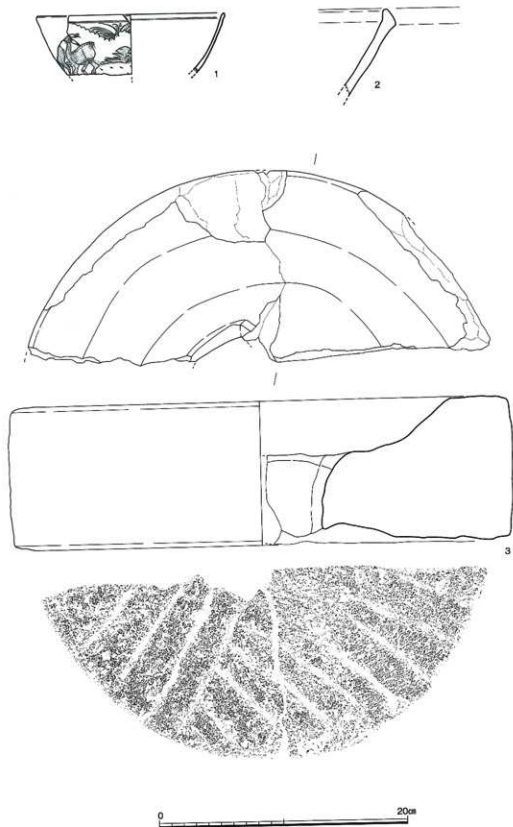
SK021出土遺物(第278・279図) 第278図1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類E群に属する製品である。外面に鹿文、口縁内面に1条の圈線を描く。2は東播系控鉢の口縁部破片で、14世紀代の所産であることから、混入品と思われる。3は安山岩を素材とする石臼の上臼である。第279図4・5は茶臼で、前者は上臼、後者は下臼である。いずれも和泉砂岩を素材とする。3～5は二次的な被熱を強く受けている。

和泉砂岩  
の茶臼



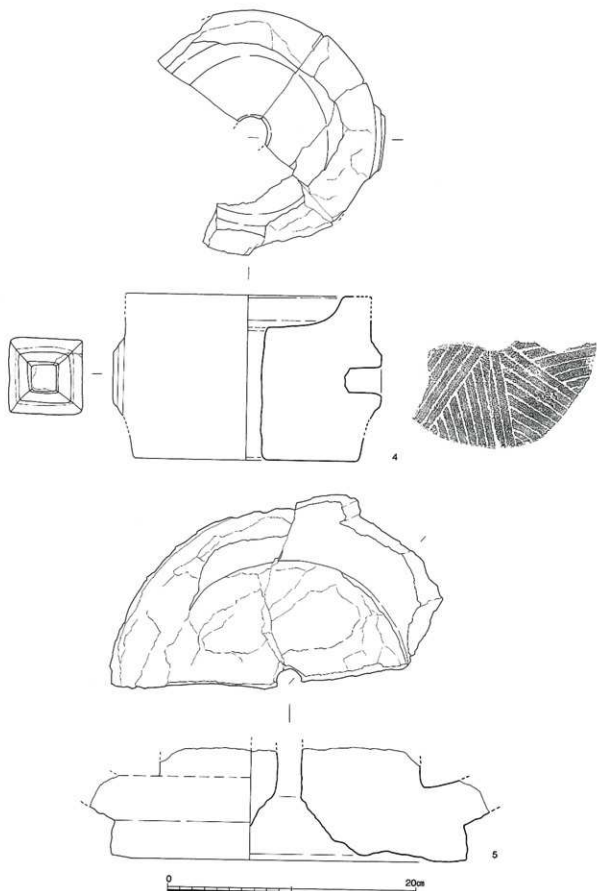
第277図 SK021実測図(1/30)

SK015 (第280図) J25区に位置する土坑である。平面形態は長楕円形を呈し、その規模は長径2.9m、短径1.0m、深さ0.2mである。近接する土坑SK026、堀SD060、柱穴列を構成する柱穴SP045・SP056、南側的大型柱穴列を構成する柱穴SP039・SP046などをすべ

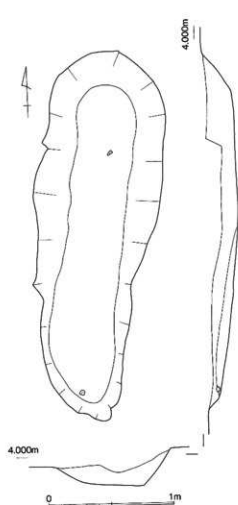


第278図 SK021 出土遺物実測図① (1/3)

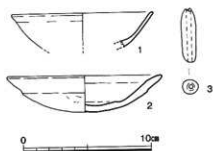




第279図 SK021 出土遺物実測図② (1/3)

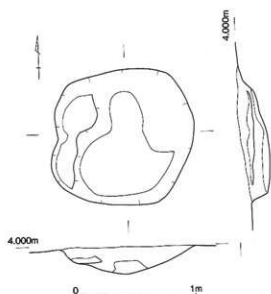


第280図 SK015実測図(1/30)

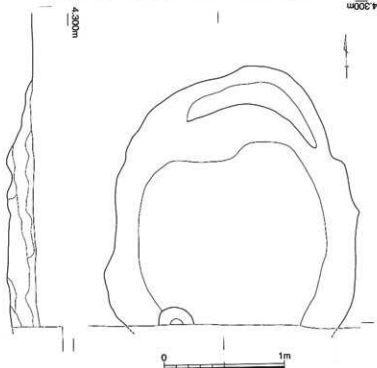


第281図 SK015出土遺物実測図(1/3)

漆継ぎの  
痕跡



第282図 SK023実測図(1/30)



第283図 SK024実測図(1/30)

て切っている。埋土中から、京都系土師器や土錘などが出土した。廃棄土坑と推定される遺構である。出土遺物の年代観から、16世紀後葉の所産と思われる。

SK015出土遺物(第281図) 1は中国産の白磁碗で、森田分類E群に属する。小破片であるが、破断面に漆継ぎの痕跡が認められる。2は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm前後であることから、塩路福年2期に比定される製品である。3は土錘の完存品である。

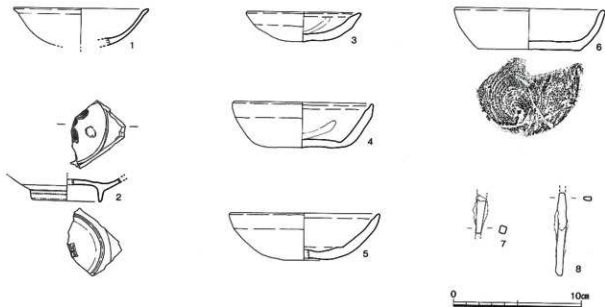
SK023 (第282図) J26区に位置する土坑である。平面形態は略円形を呈し、その規模は長径約1.2m、短径1.1m、深さ0.2mである。SD060東側に展開する柱穴を切って構築されている。遺構の切り合い関係は、SK023→柱穴となる。遺構埋土は砂および砂質土で構成され、第2南北街路SF012の構築によって完全にバックされていた。出土遺物は認められない。遺構の詳細な時期は不明であるが、周辺の状況から、16世紀後葉の所産と推定される。

SK024(第283図) J26区に位置する土坑である。平面形態は略円形を呈し、その規模は長径約1.2m、短径1.1m、深さ0.2mである。溝SD040と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD040→SK024となる。第2南北街路SF012下位で検出され、埋土上位は街路形成土で構成されていることから、第2南北街路構築直前の土坑であると推定される。埋土中から、京都系土師器の細片が出土しているが、図示できていない。遺構の状況や切り合い関係から、16世紀後葉から末葉の所産と推定される。

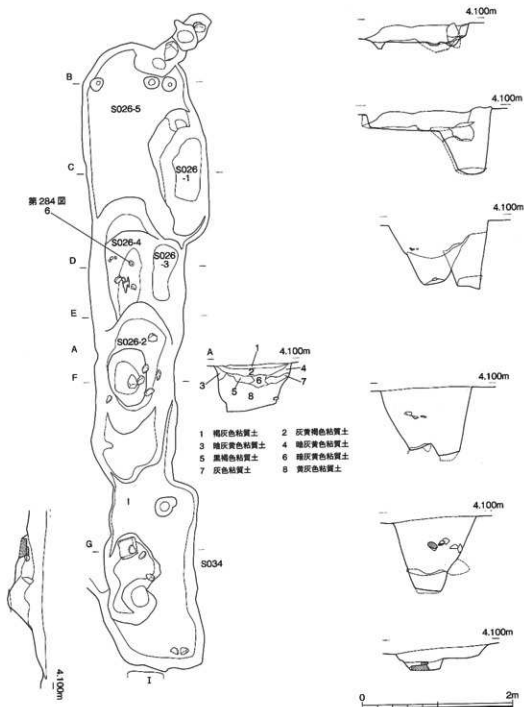
SK026 (第285図) J25・J26区に位置する土坑で、大小の土坑が次々に構築され、少なくとも6基の土坑が切り合う状況にある。SK026の規模は長径7.2m、短径2.0m、深さ1.2mとなる。また、土坑SK015・土坑SK034・柱穴SP035と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK034→SK026→SK015、SP035→SK026である。規模の異なる土坑が次々に掘られた廃棄土坑と思われるが、埋土からの出土遺物は僅少である。出土遺物の中に京都系土師器の深手の坏が認められる。また、第2南北街路SF012の構築によって完全にバックされていることを確認している。遺構の状況と出土遺物の年代から、16世紀後葉から末葉の所産と推定される。

漆継ぎの  
痕跡

SK026出土遺物 (第284図) 1は中国産の白磁湾碗で、森田分類E群に属する。16世紀代の所産である。口縁部から胴部にかけての破片であるが、破断面に漆継ぎの痕跡が認められる。2は中国景德鎮窯系青花で、小野分類E群碗である。3～5は京都系土師器で、3は皿、4・5は深手の坏である。6は土師質土器坏で、底部外面に糸切り痕が認められる。14世紀代の所産で、混入品である。7・8は器種不明の鉄器である。



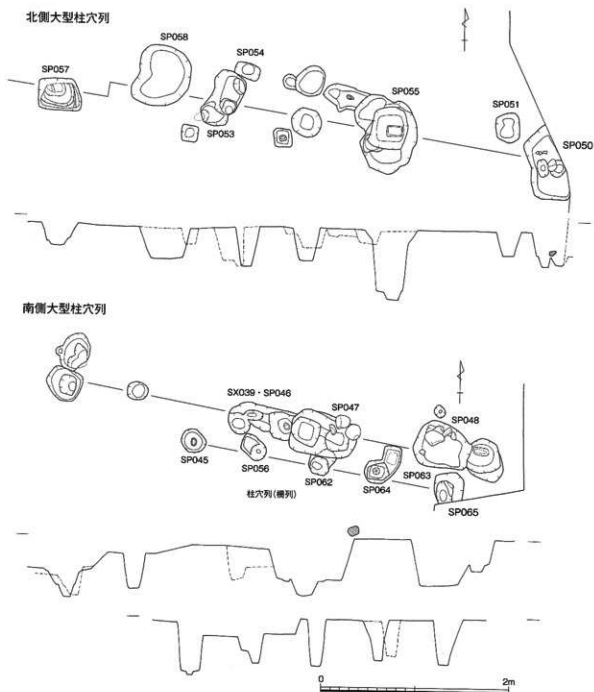
第284図 SK026出土遺物実測図 (1/3)



第285図 SK026-1～5・SK034 実測図 (1/50)

SK034 (第285図) J26区に位置する土坑である。遺構の平面形態は略隅丸長方形で、その規模は長径3.1m、短径1.5m、深さ0.2mを測る。また、内部に長径1.5m、短径0.9m、深さ0.25mの不整形の掘り込みがあり、当該部分から礫が少数出土したものの、図示できるような出土遺物は認められなかった。遺構の詳細な構築時期は不明であるが、土坑SK026に切られていることから、16世紀後葉の所産と推定される。

SK026に  
切られる



第286図 大型柱穴列および柱穴列（欄列）実測図（1/40）

大型柱穴列

大型柱穴列および柱穴列（第286図） 大型の柱穴で構成される柱穴列で、北側に位置する柱穴列と南側に位置する柱穴列の2列が認められる。いずれも第2南北街路SF012を切って構築されており、前者を北側大型柱穴列、後者を南側大型柱穴列と仮称しておく。

北側大型柱穴列

北側大型柱穴列はI24～J24区に位置し、東からSP050・SP051・SP055・SP054・SP053・SP058・SP057などの柱穴で構成される。柱穴列は遺構の切り合い関係などから、3回程度の改修が認められるようで、最終段階にはSP050-SP055-SP053-SP058-SP057を結ぶ5基の柱穴により柱穴列が形成されている。この中で、SP050とSP055は他の柱穴よりひとまわり規模が大きく、柱穴列の中でも、中心的な遺構であったと推定される。また、SP050-SP055間およびSP055-SP053間の柱痕跡の距

離はいずれも約1.6mであり、3つの柱穴がほぼ等間隔に配置されていることが注目される。

南側大型  
柱穴列

南側大型柱穴列はJ25区に位置し、東からSP048・SP047・SP046および遺構番号を付していない柱穴などで構成される。SP048とSP047には2回ないし3回の掘り直しが認められ、北側大型柱穴列と同様、3回程度の改修があったと推定される。また、柱穴SP046の上には集石遺構SX039が構築されており、礫などで柱穴を意図的に埋め戻した状況が伺えた。

柱穴列の  
距離は約  
5m(2間半)

上記の柱穴列の主軸方向はいずれも、南に振れており、中世府内の東西道路である「御所小路」の方位とほぼ同一である。北側大型柱穴列と南側大型柱穴列の距離は約5m(2間半)であり、これは既往の調査成果で得られた「御所小路」の幅員と一致する。また、南北2列の大型柱穴列は第2南北街路と御所小路の交差点付近に位置していることから、両者は「木戸」遺構である可能性が高いと考えられる。なお、南北の大型柱穴列ともこれ以上東に伸びないことが、第79次調査の結果から確認されている。これら2つの大型柱穴列は、第2南北街路SF012を切って構築されていることや出土遺物の年代観より、16世紀末葉の所産と推定される。

木戸遺構

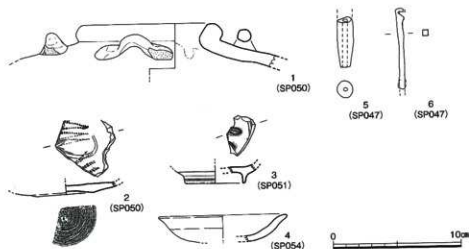
大型柱穴列  
に先行する  
柱穴列

また、南側大型柱穴列の南に直径30cm程度の柱穴5基で構成される柱穴列(横列)の存在も確認できる。東からSP065-SP064-SP062-SP056-SP045を結ぶラインがそれで、総延長は約4mを測り、各柱穴間は約1m毎に等間隔で配置されている。この柱穴列は南側大型柱穴列によって切られており、第2南北街路の形成土によってバックされている。従って、個々の柱穴からの出土遺物はないものの、大型柱穴列や第2南北街路に先行する柱穴列であり、その構築年代は16世紀後葉に遡る可能性が高い。この想定が正しいとすれば、当該柱穴列はすでに記した堀SD060・SD070とセットになる遺構である可能性が高いと考えられる。

SD060・SD070  
とセットに  
なる遺構

大型柱穴列出土遺物(第287図) 図示した資料は大型柱穴列から出土したもので、1・2はSP050、3はSP051、4はSP054、5・6はSP047からの出土遺物である。

1は中国産陶器で、肩部に把手がつく四耳壺である。外面と口縁部内面に黒褐色釉が施され、胴部内面は露胎となる。2は中国同安窯系青磁皿で、内面に劃花文と櫛状工具によるジグザグ文様が認められる。1とともに出土したが、生産年代が13世紀代に比定されるため、混入品であろう。3は中国景徳鎮窯系青花碗で、小野分類E群(饅頭心碗)に分類される。4は京都系土師器皿で、塩路福年2期以降の製品である。5は土鍾で、先端部を欠損する。6は先端部に織り込みを有する鉄製品であるが、用途不明である。



第287図 大型柱穴列出土遺物実測図(1/3)

柱穴出土遺物(第288図) その他の柱穴から出土した遺物を本項目で紹介する。図示した資料は京都系土師器皿で、塩地編年2期以降に比定される製品である。I27区に位置する柱穴SP010からの出土遺物である。



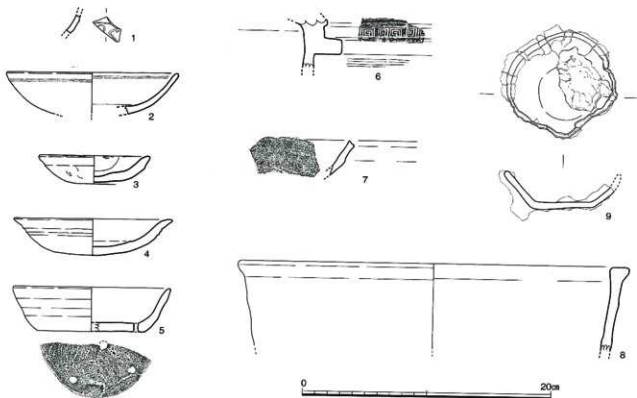
第288図 SP010出土遺物実測図(1/3)

鳥津侵攻時の焼土層(天正14年=1586)

SX001 I25～I26区で検出した焼土層である。南北33m、東西1.4mの範囲に焼土の広がり認められる。焼土層の位置は国指定史跡大友氏館跡の領域内に位置するため、調査は上面での遺物採集に留め、これ以上の掘り下げを進めていない。出土遺物からは当該焼土層は16世紀末葉に比定される可能性が高く、この年代が妥当であるとするならば、焼土層が形成される契機として天正14年(1586)の鳥津侵攻が想定される。

鉄製杓子

SX001出土遺物(第289図) 1は中国産の青白磁である。外面に印花による花文を有し、内面は露胎となる。小破片のため断定できないが、壺などの袋物である可能性が高い。2は中国景徳鎮窯系青花碗で、口縁内外面に1条の圈線を描く。小野分類E群に属する製品で、16世紀後葉の所産である。3・4は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5mm以上を測ることから、塩地編年3期の製品である。16世紀後葉から末葉の所産である。5は土師質土器環で、底部の残存部に3箇所の貫通穴が認められる。14世紀代の製品と思われるため、混入品であろう。6は在地系の瓦質土器香炉で、外面に二連雷文の刻印(スタンプ)を押捺する。7も在地系の瓦質土器播鉢で、内面に櫛状工具による描目が認められる。8は瓦質土器の火鉢の口縁部で、胴部は長胴形を呈する。9は鉄製の杓子である。



第289図 SX001出土遺物実測図(1/3)

(4) 16世紀前葉～中葉の遺構・  
遺物 (第290図)

遺構の集中

特異な遺構

概要 16世紀前葉から中葉に比定される遺構は、土坑5基である。5基の土坑はいずれも調査区南東側付近に集中する。土坑からの出土遺物は京都系土師器皿が主体であり、また多くの土坑の規模が小型で、底面付近に白色粘土が堆積するものが多いなど、共通する特徴を有する。通常の廃棄土坑とは異なる特異な遺構と考えられる。なお、同様な土坑は本書で報告する67次調査区K・L-27・28区や第78次調査区にも存在しており、これらの土坑が分布する空間の特異性が強調される。

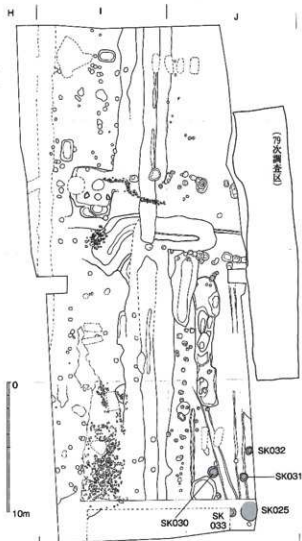
第2南北街路構築以前の遺構

SK025 (第291図) J26～J27区に位置する土坑である。平面形態は不整形を呈し、遺構の東端部は調査区外に伸びる。その規模は長径1.65m、短径1.35m、深さ1.1mで、他の土坑と比較して、大規模な遺構である。土坑は第2南北街路SF012を形成する整地土により完全にバックされ、第2南北街路構築以前の遺構であることを確認している。土坑の深さが深いため、第2北街路形成土が当該土坑に陥没している状況が認められ、遺構検出時には埋土が竊状に堆積する状況が認められた。遺構内部から、京都系土師器の出土が一定量認められた。

SK025出土遺物 (第292図1～3) 1～3は京都系土師器皿である。器壁はいずれも5mm程度と薄く、塩地編年1期に位置づけられる遺物である。16世紀前葉から中葉の所産である。

SK030 (第291図) J26区に位置する土坑である。平面形態は略円形を呈し、その規模は径0.8m、深さ0.2mである。時期不明の溝SD043と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD043→SK030である。遺構は第2南北街路SF012を形成する整地土により完全にバックされている。遺構の底面付近から、小破片となった京都系土師器が多量に出土した。

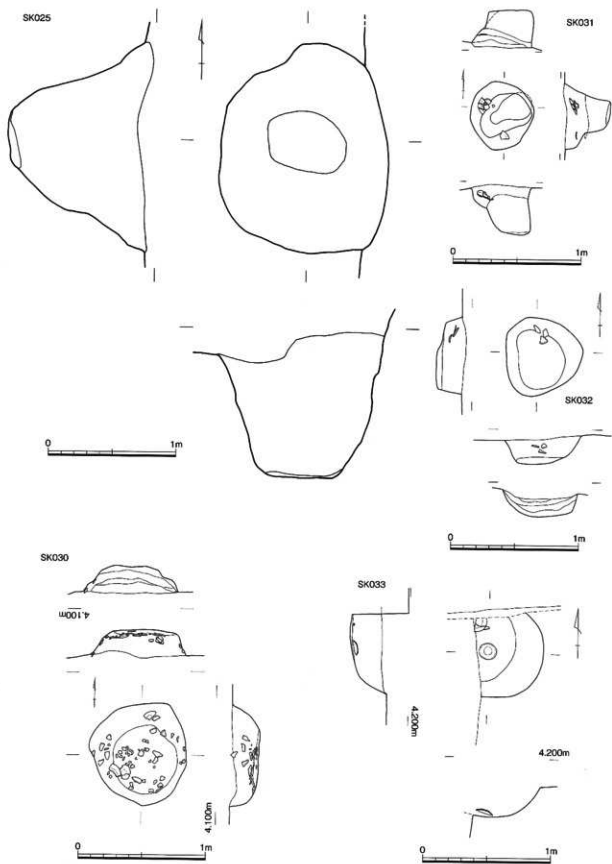
SK030出土遺物 (第292図4～6) 4～6は京都系土師器皿で、塩路編年1期に位置づけられる遺物である。16世紀前葉から中葉の所産である。



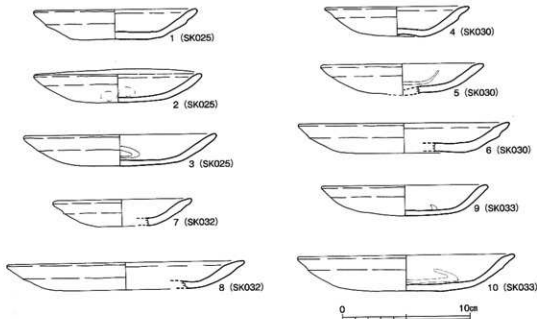
第290図 16世紀前葉～中葉の遺構 (1/300)



第3節 中世大友府内町跡第52次調査



第291図 SK025・SK030・SK031・SK032・SK033実測図(1/30)



第292図 SK025・SK030・SK032・SK033出土遺物実測図(1/3)

SK031 (第291図) J26区に位置する土坑である。平面形態は略円形を呈し、その規模は径0.5m、深さ0.2mである。14世紀代と推定される溝SD044と切り合い関係を有し、さらに時期不明の柱穴と重複している。遺構の構築順序はSD044→柱穴→SK030である。土坑は第2南北街路SF012を形成する整地土により完全にバックされていることを確認した。土坑の埋土下位には白色粘土が堆積しており、当該層の付近から京都系土師器皿が少量出土した。遺物は図示できなかったが、16世紀から中葉に位置づけられる埴地編年1期の京都系土師器である。

埋土下位に  
白色粘土が  
堆積

SK032 (第291図) J26区に位置する土坑である。平面形態は不整形円形を呈し、その規模は径0.6m、深さ0.2mである。14世紀代と推定される溝SD044と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD044→SK032である。土坑は第2南北街路SF012を形成する整地土により完全にバックされていることを確認した。土坑の埋土下位には白色粘土が堆積しており、遺構の底面付近からやや浮いた状態で京都系土師器皿が少量出土した。

SK032出土遺物(第292図7・8) 7・8は京都系土師器皿で、埴地編年1期に位置づけられる遺物である。16世紀前葉から中葉の所産である。

SK033 (第291図) J26区に位置する土坑である。平面形態は略円形を呈し、その規模は残存長0.5m、深さ0.25mである。西側は鉄橋構築時の攪乱により、完全に破壊されていた。土坑は第2南北街路SF012を形成する整地土により完全にバックされている。土坑の埋土下位には白色粘土が堆積しており、攪乱壁面を清掃する作業によって、土坑埋土の堆積状況が良好な状態で確認できた(写真図版9参照)。遺構底面から2枚の京都系土師器皿が出土した。これらの遺物は本来完形品であったと推定されるが、2枚のうち1枚は攪乱により破損を受けていた。

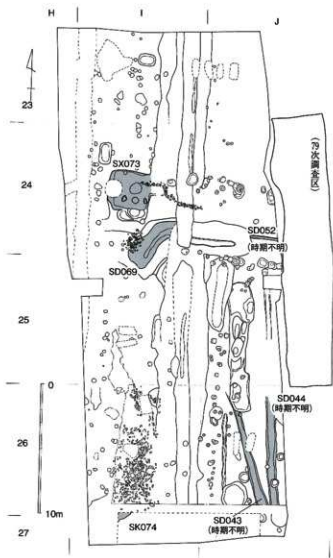
埋土下位に  
白色粘土が  
堆積

SK033出土遺物(第292図9・10) 9・10は京都系土師器皿で、埴地編年1期に比定される遺物である。16世紀前葉から中葉の所産である。

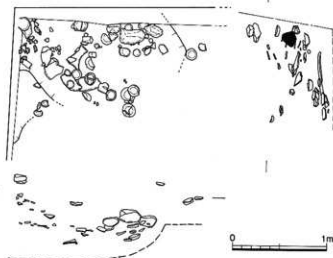
(5) 14世紀の遺構・遺物

概要 14世紀代に比定される遺構は土坑1・性格不明遺構1・弧状に伸びる溝1・溝4の計7基である。このうち、土坑SK074の出土遺物には多量の土師質土器小皿や坏、輪花形の瓦質土器火鉢、亀山・勝岡田系の須恵質土器甕などが相伴しており、14世紀代の良好な一括資料である。また、他の遺構も14世紀代に比定される可能性が高く、これらの遺構の解釈が今後の課題となる。

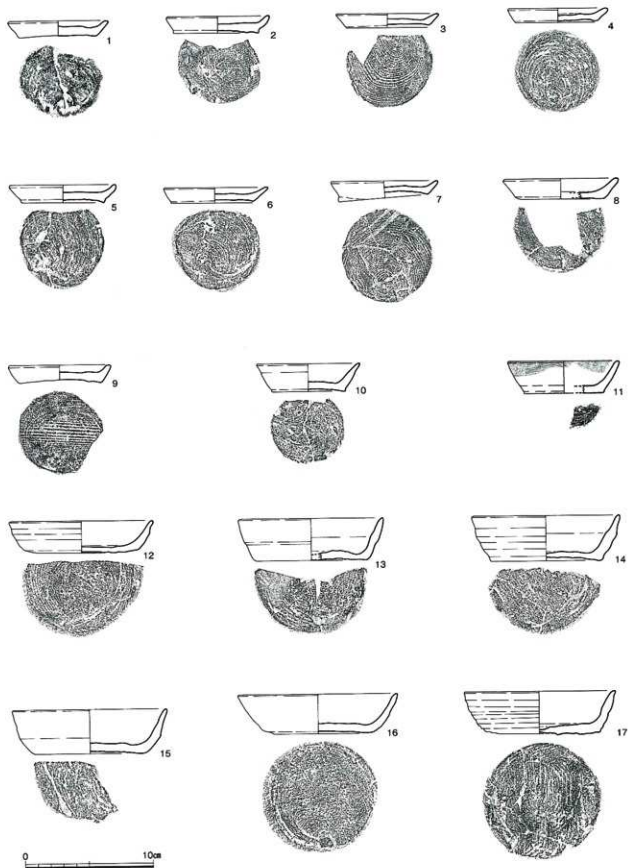
SK074 (第294図) I 27区に位置する土坑である。当該遺構が所在する地点は国指定史跡大友氏遺跡の範囲内となるため、遺構の掘り下げを予定していない地点であった。しかし、当該地点には鉄橋建設による大規模な攪乱が存在しており、攪乱内に堆積する土壌の除去と壁面清掃を行う時点で多量の遺物が包含されていることが確認され、遺物の取り上げと一部の遺構埋土の掘り下げを行った。当該遺構の平面形態は略楕円形で、長さ1.6m以上、短径1.4m以上、深さ60cm以上を測る大型の土坑である。土坑には少なくとも1回の掘り返しが認められた。出土遺物には多量の土師質土器小皿や坏、輪花形の瓦質土器火鉢、亀山・勝岡田系の須恵質土器甕などがあり、これらの遺物の年代観から、当該遺構は14世紀代の所産と推定される。



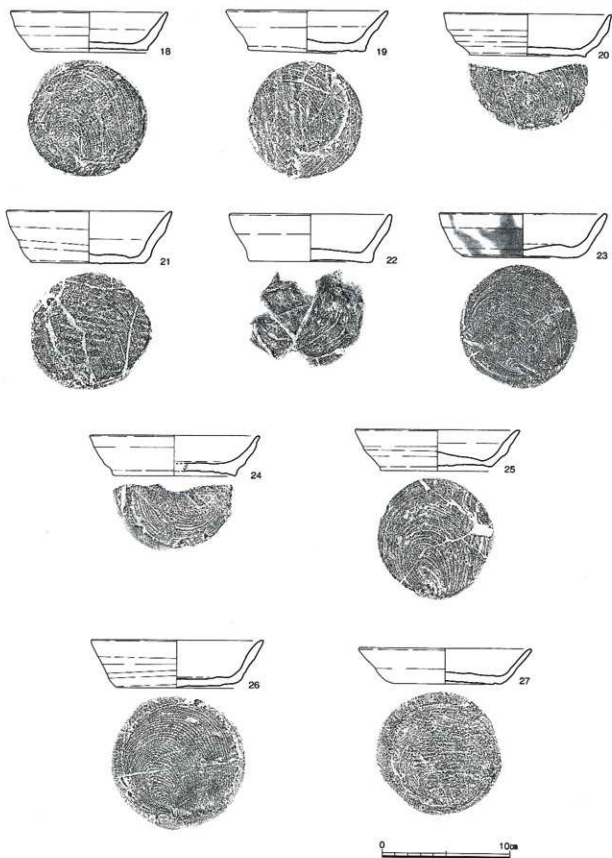
第293図 14世紀の遺構 (1/300)



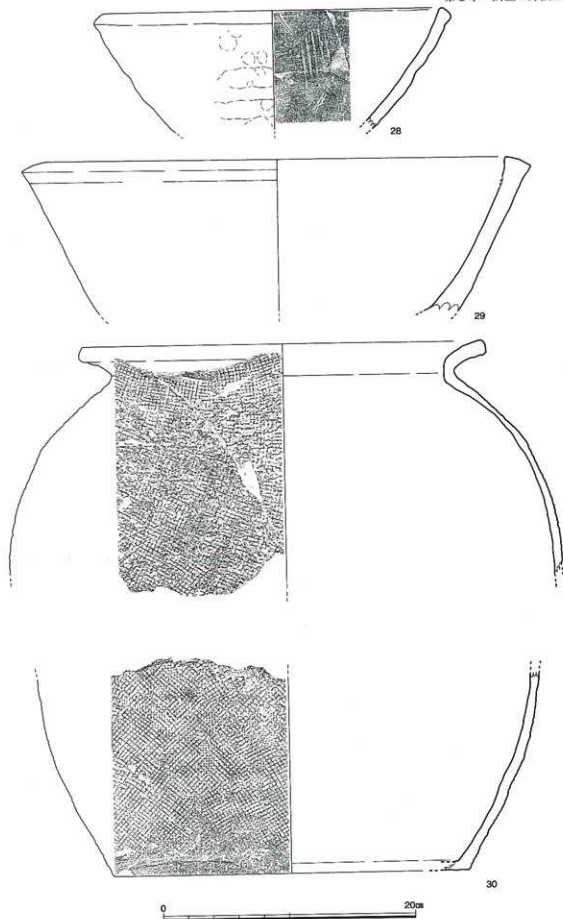
第294図 SK074実測図 (1/40)



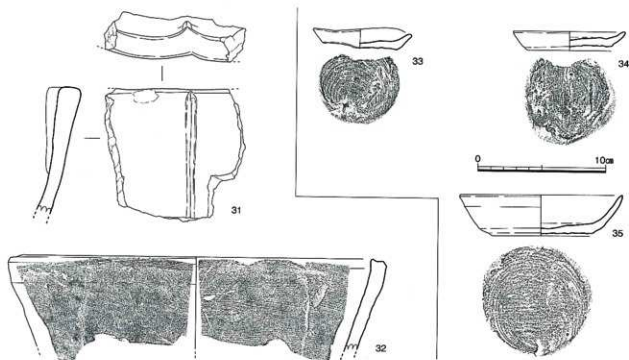
第295図 SK074 出土遺物実測図① (1/3)



第296図 SK074 出土遺物実測図② (1/3)



第297図 SK074出土遺物実測図③ (1/3)



第298図 SK074 出土遺物実測図④ (1/3)

亀山・勝岡  
田系須恵質  
土器甕

輪花形火鉢

良好な一括  
資料

SK074出土遺物(第295～298図) 第295図1～11は土師質土器の小皿である。小皿には器高が低いもの(1～9)と器高がやや高いもの(10・11)の2形態がある。底部には糸切り痕が認められるが、糸切り痕とともに板状圧痕が認められる個体(9)もある。12～第296図27は土師質土器の坏で、口縁端部が細くなり、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。底部には糸切り痕が認められる。第297図28は瓦質土器播鉢で、内面に播目、外面に指押しえ痕が認められる。29は瓦質土器鉢で、口縁端部がやや肥厚し、底部は大きな平底を呈する。内外面ともナデ調整を施す。30は亀山・勝岡田系の須恵質土器甕で、口縁部が大きく外湾する形態を呈し、底部は大きな平底となる。外面には格子目叩きが顕著に認められるが、内面には同心円叩きがなく、ナデによって仕上げられている。第298図31は「輪花形火鉢」と呼ばれるもので、大和産瓦質土器あるいはその模倣形態と考えられる資料の口縁部である。当該資料には、口縁部外面に菊花形の刻印(スタンプ)は押捺されていない。14世紀代の所産<sup>1)</sup>である。32は瓦質土器鍋の口縁部で、口縁端部は鋳が退化したような形態を呈する。外面にはナデ、内面には刷毛状工具で調整がなされている。第295図1～第298図32は土坑からの一括出土品であり、14世紀代の亀山・勝岡田系の須恵質土器甕や輪花型の瓦質土器火鉢などが、在地産の土師質土器小皿・坏と共存する良好な一括資料と考えられる。33・34は土師質土器小皿、35は土師質土器坏であるが、出土地点から判断すると、1～32とは別遺構の包含遺物であった可能性が高いものである。

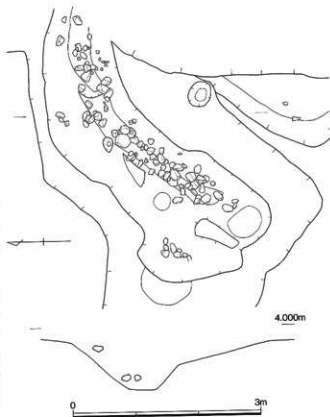
註(1) 瓦質土器の輪花形火鉢は大和産瓦質土器あるいはその模倣形態で、14世紀前半代を主体に生産された製品である。具体的な年代が判明している事例としては、韓国新安沈没船積載資料(至治元年=1323年)がある。大友府内町跡の調査では第31次調査区SK13で、外面に菊花文を押捺した口縁部破片が出土している。

菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989年)  
今尾文昭「花かたにやくなら火鉢・考」(『考古学和生活文化』同志社大学考古学シリーズV 1992年)  
大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内5-中世大友府内町跡第31次調査区(瑞光寺周辺)-」  
(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第10集 2006年 61頁 第79図2)

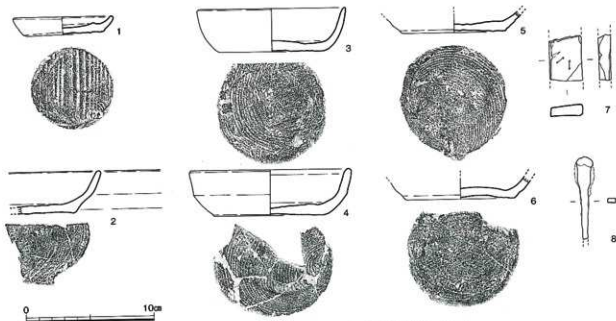
SD069 (第299図) I24～I25区に位置する溝である。溝の平面形態は弧状を呈し、緩やかに東側に湾曲する。溝の規模は長さ約5.0m、幅1.4m、深さ50cmを測る。遺構の東端部を16世紀後葉の堀SD060によって切られている。埋土中から拳大の礫が多量に出土しており、出土遺物の中に在地系の土師質土器杯や小皿などが認められた。後述する性格不明の遺構SX073と同時に存在した一連の遺構である可能性が考えられる。出土遺物の年代観より、遺構の構築年代は14世紀代に比定される。

SD069出土遺物 (第300図) 1は土師質土器小皿で、底部には糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。2～6は土師質土器杯で、全形がうかがえる3・4についてみると、口縁部が内湾気味に立ち上がる形態を呈する。底部外面には右回転の糸切り痕が認められる。1～6の土師質土器は在地産のもので、14世紀代の所産と推定される。7は頁岩を素材とする紙石の破片である。8は鉄器で錆出が著しいが、鉄鍍と推定される資料である。

SX073と  
一連の  
遺構

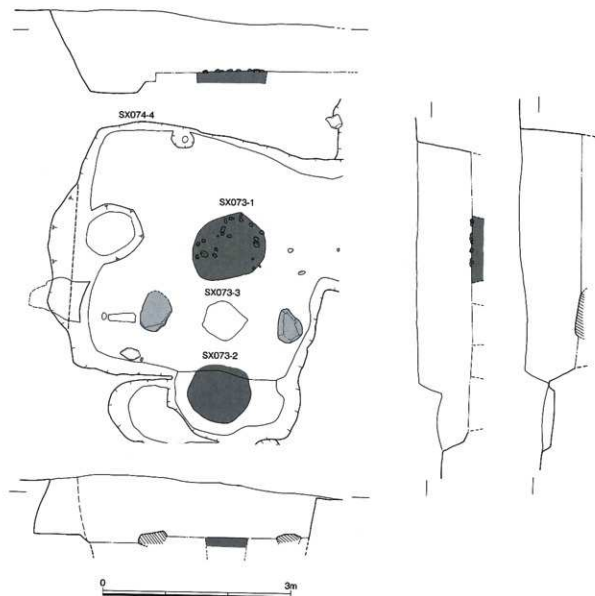


第299図 SD069実測図 (1/60)



第300図 SD069出土遺物実測図 (1/3)





第301図 SX073実測図(1/60)

SX073(第301図) I24区に位置する性格不明の遺構である。当該遺構は国指定大友氏館跡の領域内に位置しているため、当初の予定では掘り下げを行わない予定であった。しかしながら、検出段階で、当該遺構が大友氏館跡の「門」または「出入口」に相当する地点に位置していることや一定規模の遺構であることが判明したため、遺構の時期や性格をつかむための最小限の掘り下げを行うことにした。検出面から約90cm掘り下げたところ、遺構内部に大型の円形掘方SX073-1とSX073-2、小型の円形掘方SX073-3を検出した。そこで検出段階で確認した大型の方形プランをSX073-4とし、遺構の切り合い関係や構築順序を精査した。大型の円形掘方SX073-1とSX073-2は、径80~90cmを測り、埋土中には砂や拳大の礫などを含む。埋土の様相が類似していることから、両者が一対となって機能していたことは確実で、その心々距離は約180cmである。ふたつの掘方の間には径約50cmの円形掘方SX073-3が位置している。SX073-3の埋土は黒褐色であり、SX073-1とSX073-2と同時期である可能性は少ないと考える。大型の方形プランの掘方SX073-4は、一辺約3mを測る。掘方の南側には長径50cm、

最小限の掘り下げ

短径30cm程度の礫2個が埋没していた。礫は一見、正位置で設置されているようにも見え、礎石であった可能性が考えられなくもないが、上面が完全に平らではなく、礫上に柱等を立てるには適していないように思われる。遺構の平面プランでの検討からは、SXSX073-4がまず掘られ、その後SX073-1・SX073-2およびSX073-3が構築されている。大型の円形掘方SX073-1とSX073-2が大友氏館跡の「門」または「出入口」に関係する遺構である可能性は考慮に値する事象ではあるが、周辺に同じような遺構の存在は確認されておらず、今回の調査所見ではSX073の性格を「不明遺構」であるとしておきたい。SX073-4の埋土中からは在地系の土師質土器の小片・破片が一定量出土しているものの、図化可能な資料は僅少である。遺構の構築年代は、出土遺物の年代観から、14世紀代に比定される。

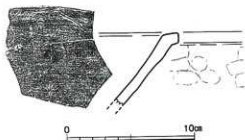
性格不明の  
遺構



第302図 SX073 出土遺物実測図 (1/3)

**SX073 出土遺物 (第302図)** 図示した遺物は土師質土器小皿で、口縁部が外反し、底部には糸切り痕が認められる。14世紀代の所産と考えられる。

**SD042・SD044** SD042はJ25区、SD044はJ26区に位置する溝である。SD042の規模は長さ4.0m、幅0.4m、深さ20m、SD044の規模は長さ8.4m、幅0.7m、深さ15cmである。両者とも南北方向に伸びる溝であることから、本来は同一の遺構であったと推定される。SD042の埋土中から、瓦質土器鍋の小破片が出土しており、当該遺物の年代観から、14世紀代の遺構と推定される。



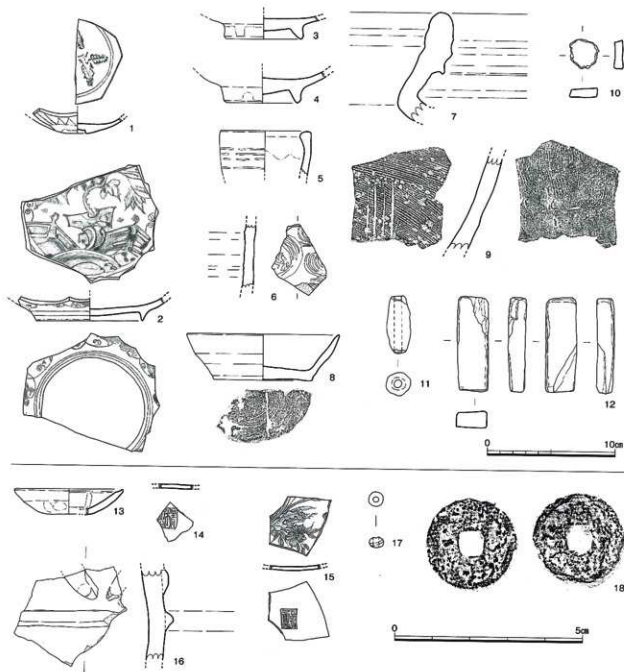
第303図 SD042 出土遺物実測図 (1/3)

**SD042 出土遺物 (第303図)** 図示した遺物は、瓦質土器鍋の口縁部である。外面に削りと指押えの痕跡、内面にナデが認められる。14世紀代の所産と推定される。

**SD043** 調査区を斜め方向に走る溝で、J26区に位置する。その規模は長さ9.0m、幅0.7m、深さ20cmである。16世紀後葉の土坑SK034、16世紀前葉から中葉の土坑SK030から切られている。また、隣接する場所に14世紀代の溝SD044が位置するが、当該遺構との切り合い関係は明確にできなかった。出土遺物はなく、詳細な構築年代は不明である。遺構の切り合いから16世紀中葉以前の所産であることは間違いないが、周辺の遺構の状態から14世紀代の遺構である可能性を考えておきたい。

**SD052** 東西方向に伸びる小規模な溝で、J24区に位置する。その規模は長さ2.2m、幅0.2m、深さ2.5cmである。16世紀後葉の溝SD070と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD052→SD070である。出土遺物はなく、詳細な構築年代は不明である。遺構の切り合いから16世紀後葉以前の所産であることは間違いないが、周辺の遺構の状態から14世紀代の遺構である可能性を考えておきたい。第79次調査区で延長部が確認されているが、出土遺物がなく、時期を確定できなかった。

第79次  
調査区で  
延長部を  
確認



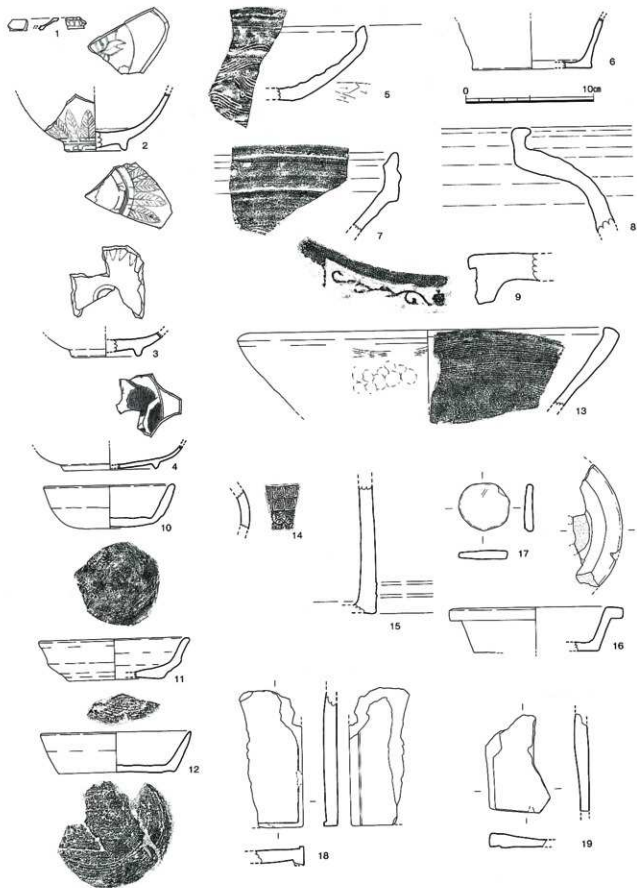
第304図 包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3・1/1)

(6) 包含層・整地層の出土遺物 (第304～307図)

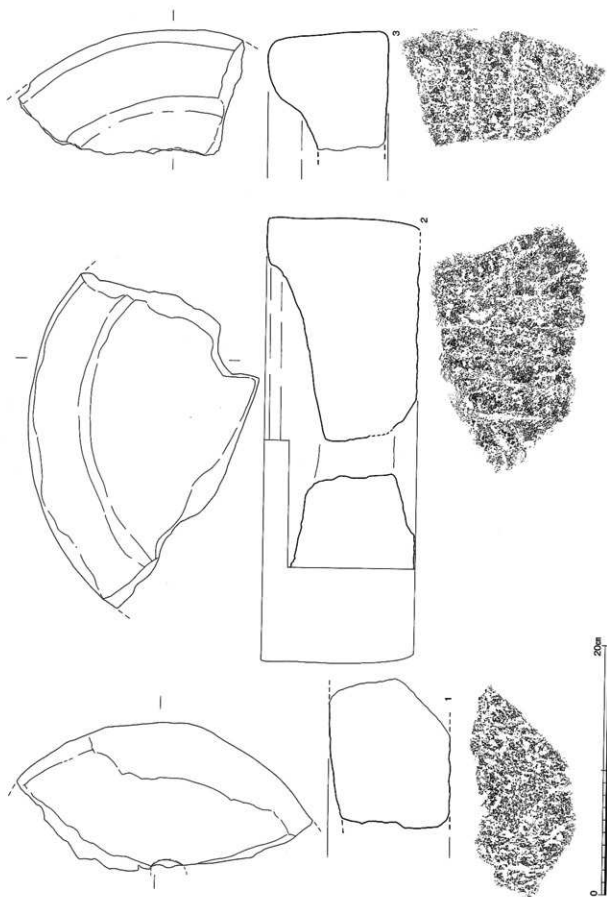
包含層・整地層からの出土遺物を一括して報告する。

第304図1～12は、表土または遺構検出中に採集した遺物である。1・2は中国景徳鎮系青花で、1は碁笥底となる小野分類C群皿、2はE群皿である。3～5は中国龍泉窯系青磁で、3・4は青磁碗の底部、5は香炉の口縁部から胴部である。6は中国景徳鎮系青白磁梅瓶で、胴部外面に梅状工具による満文を描く。7は備前系陶器大甕の口縁部で、乗岡編年近世1期の所産である。8は土師質土器坏で、底部外面に右回転の糸切り痕を有する。9は瓦質土器播鉢で、内外面に刷毛状工具による調整が認められるほか、内面に4条の播目を有する。10は土師質土器の破片を利用した土器片加工品である。11は土錘、12は頁岩を素材とする砥石である。

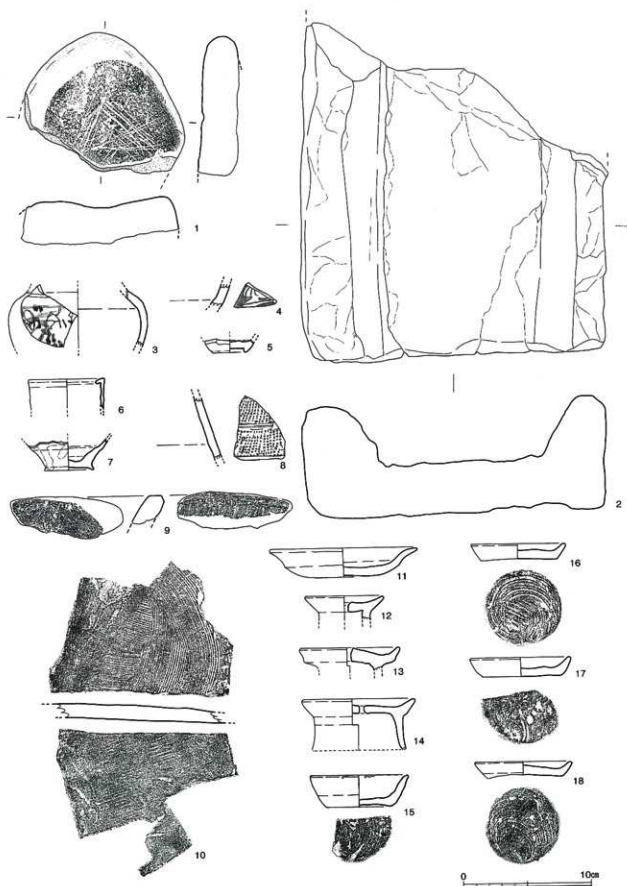
青白磁  
梅瓶



第305図 包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3)



第306図 包含層・墓地層出土遺物実測図④ (1/3)



第307図 包含層・整地層出土遺物実測図③ (1/3)

13～18は、H23・H24区から採集した遺物である。13は京都系土師器皿である。14・15は中国景德鎮窯系青花皿で、いずれも小野分類E群皿である。14には「精製」、15には「高貴佳器」の裏底銘が描かれている。16は備前焼水屋甕の胴部破片である。外面に双耳と突帯の一部が残存する。17はガラス小玉で、色調は淡青色を呈する。18は中国産の銅銭であるが、錆出のため、銭文は判読できない。

中国産  
播鉢

第305～306図1・2は、I23区から採集した遺物である。第305図1は中国産青釉小皿の破片である。2は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類C群碗である。3は中国漳州窯系青花碗である。4は中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類E群皿である。5は焼締陶器播鉢で、内面に柳描波状文のような描目を有する。中国産の製品である可能性が高い。6は中国産焼締陶器甕の底部破片で、底部外面は露胎で未調整となる。7・8は備前焼で、前者は播鉢、後者は水屋甕である。9は均整唐草文軒平瓦で、中心飾りは退化した宝珠文である。10は京都系土師器の深手の坏で、16世紀後葉以降の所産である。11・12は土師質土器坏で、14世紀代の製品である。13は瓦質土器鉢で、内面に刷毛状工具による調整痕、外面に指頭痕が認められる。14は器種不明の瓦質土器で、外面に雷文と七宝文の刻印（スタンプ）が認められる。花瓶の胴部破片であろうか。15は在地系の瓦質土器で、底部付近の外面に2条の突帯を巡らす。16は土師質土器であるが、器種・用途は不明である。近世以降の所産で、混入品の可能性が考えられる。17は瓦質土器の破片を素材とした土器片加工品である。18・19は硯である。第306図1～3は石臼で、いずれも安山岩を素材とする。第307図1は安山岩で、礫の一面に不整方向の条痕が多数認められる。砥石として使用された可能性がある。2は凝灰岩を素材とする石製品で、用途不明である。横断面が凹字形を呈する。

磁州窯系  
白地鉄絵  
陶器壺

第307図3～18・第308図1～7は、I24区から採集した遺物である。第307図3は中国景德鎮系青花で、壺などの袋物の破片である。4は磁州窯系白地鉄絵壺の小破片で、製作年代は13～14世紀代に遡る。5は中国景德鎮系白磁小坏の底部破片で、森田分類のE群に属する製品のひとつである。6は中国産の青磁香炉の口縁部破片である。7は中国南部産と推定される褐釉陶器壺の底部で、残存部外面の一部に施軸が認められる他は、内面や底部外面は露胎となる。8は朝鮮王朝産の象嵌陶器瓶で、15世紀代に比定される。9は滑石製鍋の口縁部破片である。10は瓦質土器の底部破片で、内外面に刷毛状工具による調整痕が認められる。器種は不明である。11は京都系土師器皿で、16世紀後葉以降の製品である。12～14は在地系の土師質土器燗台で、皿部の底部に貫通孔を有する。14世紀代の製品であろう。15～18は土師質土器小皿で、15は器高がやや深いもの、他は口縁部の立ち上がりが高く、器高が低いものである。第308図1・2は土師質土器坏で、底部外面に回転系切り痕が認められる。3は小破片であるが、吉備系土師器塊の底部である。4は備前焼瓶の頸部破片で、外面にヘラ記号が認められる。5は瓦質土器鍋で、口縁部は鈔が退化したような形態を呈する。6は中国北宋代の銅銭で、「元祐通寶」（初鑄年代1086年）である。7は鉛玉（鉄砲玉）で、重量は9.7gである。

土師質土器  
燗台吉備系  
土師器塊

鉛玉

吉州窯系  
白地鉄絵  
陶器壺

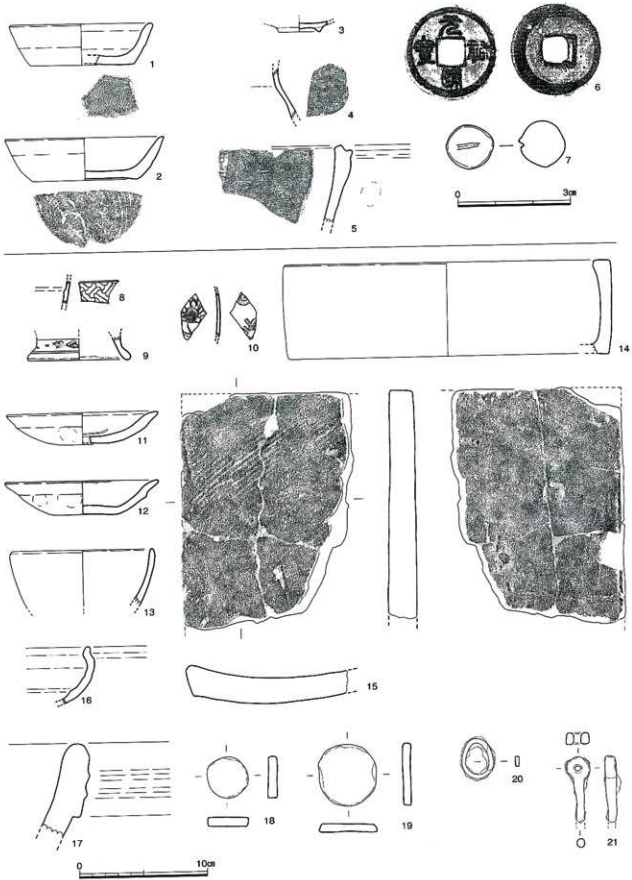
第308図8～21は、I26区から採集した遺物である。8は中国吉州窯系白地鉄絵陶器壺<sup>註2</sup>で、外面に「勾連文」と呼ばれる文様を描く。14世紀代の所産である。約40m北東側に位置する大友氏館跡第21次調査SX100（疎敷き遺構）<sup>註3</sup>から、同一個体と思われる破片が出土している。

註 2) 中国吉州窯系白地鉄絵陶器壺については、下記文献を参照した。

亀井明徳「日本出土の吉州窯陶器について」（『貿易陶磁研究』第11号 1991年）

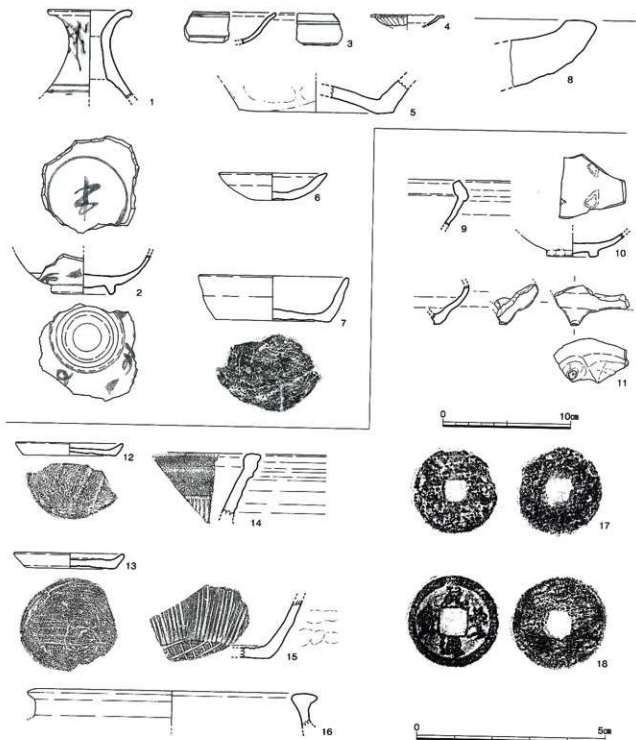
3) 長直信「大友氏館跡第21次調査」（『大分市市内遺跡確認調査概報-2008年度-』

（大分市教育委員会 2009年 11頁第10図2）



第308図 包含層・整地層出土遺物実測図⑤ (1/3・1/1)





第309図 包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/3・1/1)

9は中国景德鎮窯系青花瓶で、脚台部の破片である。10は中国産の五彩の破片である。11・12は京都系土師器皿、13は在地系の瓦質土器碗である。14も在地系の瓦質土器鉢または火鉢で、底部に脚を有する器形に復元されるが、口縁部から胴部のみが残存する。15は平瓦で、外面にナデ調整、内面に糸切り痕（コビキA）が認められる。16・17は備前焼で、16は鉢、17は大甕の口縁部である。18・19は土器片加工品で、いずれも瓦質土器を素材とする。20は銅製品の環、21は用途不明の鉄製品である。

第309図1～8は、I25区から採集した遺物である。1・2は中国漳州窯系青花で、1は瓶、2は碗である。3は中国景德鎮窯系青花で、小野分類のE群皿に分類される。4は中国産の青軸陶器の菊花形小皿、5は褐釉陶器の底部破片である。6は京都系土師器皿で16世紀後葉の製品、7は土師質土器杯で14世紀代の製品である。8は茶白の下臼で、鈿部の破片である。和泉砂岩を素材とする。

9～18は、J26区から採集した遺物である。9は中国南部産焼締陶器鉢で、吉田分類B類に属する。10は朝鮮王朝産白磁皿で、見込みに目積みの跡が認められる。11は瀬戸美濃産陶器香炉で、外面に鉄軸を施し、内面は露胎となる。12・13は土師質土器小皿で、12の底部外面には右回転の糸切り痕、13の底部外面には糸切り痕のほか、板状圧痕が認められる。いずれも14世紀代の所産である。14は陶器播鉢で、産地は不明である。15は瓦質土器播鉢で、底部に格子目状の播目、胴部内面には放射状の播目が施されている。16は陶器の壘で、近世の所産である。17・18は銅銭で、17は鋳出のため判読不明、18は中国北宋代の「元豊通寶」で、初鋳年代は1078年である。

### 3 小結

第52次調査で検出された遺構の変遷を再確認して、小結としたい(第310・311図)。

14世紀 14世紀に比定される遺構としては、溝5・性格不明遺構1・土坑1がある。このうち性格不明遺構SX073と溝SD069は、出土遺物や遺構の位置から判断すると、同時期に存在した一連の遺構である可能性が考えられる。両者は国指定史跡大友氏館跡の東辺中央部付近に位置することから、館跡の「門跡」や「出入口」に関連する遺構である可能性も考慮されるものである。しかしながら、SX073は一辺約3mの方形の掘方を持ち、それを切る形で径80～90cmの大型柱穴2基が構築される遺構で、単独で構築されていることから、現状でこの遺構の性格を積極的に「門跡」や「出入口」と解釈することは困難である印象を受ける。当該遺構の性格を確定するためには、本調査区の西側や北側の未掘部分の発掘調査など、更なる調査の進展を経た上で解釈すべきであろう。

なお、2002年度に大分市教育委員会が実施した大友氏館跡第12次調査<sup>(4)</sup>で、柱穴の底に平石を据えた規格的性の高い配置をもつ掘立柱建物群が検出されている。これらの建物群と今回報告した府内町跡第52次調査区の性格不明遺構SX073が同時期に存在した可能性を指摘する考えがある<sup>(5)</sup>。大友氏館跡第12次調査の掘立柱建物群は「15世紀前葉」、府内町跡第52次調査の遺構は「14世紀代」に比定されており、年代的な齟齬が生じている。これらの遺構の年代の根拠となるものは、「箱形」と仮称される在地系の土師質土器である。しかしながら、箱型の土師質土器については詳細な型式変遷や実年代がつまびらかにされていない現状があり、館跡の掘立柱建物群と52次調査区の性格不明遺構SX073が同時期に存在していたのか、またその実年代がいつに比定されるのかという問題についても、今回は保留すべきと考えている。

調査区南西隅付近で検出された土坑SK074からは、在地系の箱形土師質土器である小皿や坏、亀山・勝間田系の須恵質土器壘、大和産瓦質土器(あるいはその模倣形態)である輪花形火鉢が良好な状態で共存した。輪花形火鉢は14世紀代を主体的に生産された製品であることが確認されており、この土坑から出土した一括資料が「14世紀代」の基準資料になる可能性がある。型式変遷や実年代の詳細が明らかにされていない在地系の箱形土師質土器を検討する上で、今後注目しておきたい資料である。

性格不明  
遺構SX073  
と溝SD069

土坑SK074  
14世紀代の  
良好な一括  
資料

註 (4)大分市教育委員会「大友氏館跡第12次調査」(『大分市市内遺跡確認調査概報2002年度』2003年)

(5)王永光洋・坂本高弘「大友宗麟の戦国都市 豊後府内」(シリーズ「遺跡を学ぶ」056 新泉社 2009年)

また、第52次調査区では15世紀後葉から16世紀初頭に構築された遺構は皆無であり、当該時期については空白期となる。

土器  
(カワラケ)  
廃棄土坑

**16世紀前葉～中葉** 16世紀前葉から中葉に比定される遺構は、土坑5基(SK025・SK030・SK030・SK032・SK033)である。5基の土坑は調査区南東側付近(J25・J26区)に集中しており、SK025を除いて、土坑の大多数は径が0.5～0.8mと小規模である。出土遺物は京都系土師器皿が主となり、陶磁器や他の土師質土器・瓦質土器を含まない特異な遺物組成となる。このような「土器(カワラケ)廃棄土坑」ともいえる特異な土坑は、第67次調査C区のSK208・SK209、第78次調査のSK003でも検出されている。以上の土坑から出土した京都系土師は土坑1基につき、数点から10点以下の数量に留まるが、第67次調査C区の土坑SK183や第67次調査B区の溝SD078からは100点以上の皿が廃棄されており、第79次調査の溝SD043からは土師器皿が細かく破砕された状態で出土している。これらの遺構が分布する空間は特異なものであり、遺構が位置する地点の周辺が、何らかの儀式空間として使用されていたことが想定される。また、出土する京都系土師器皿は、豊後府内の出土品としては薄手で古式のもの(塩路福年1期)であることも注目しておきたい。

第2南北  
街路 SF012

**16世紀後葉** 先ず、16世紀後葉の古い段階で、堀SD060・SD070、溝SD072が掘削される。SD060・SD070は屈曲する堀で、SD070の南側には同時期に存在したと考えられる柱穴列(構列)も構築されている。これらの遺構は、武家地などの屋敷を区画する遺構と推定される。

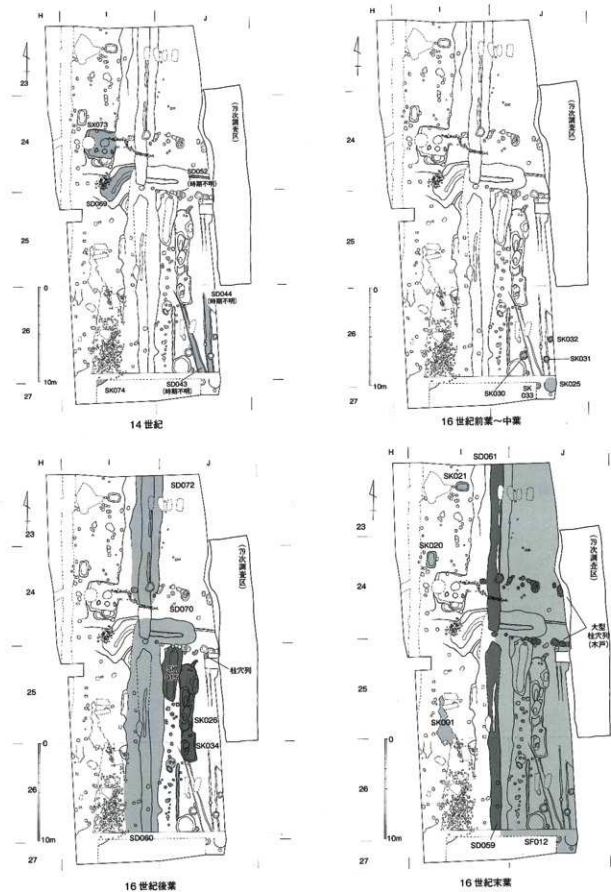
屋敷から  
街路へ

この堀や溝は短期間で埋没し、その直後に第2南北街路SF012が造成される。これまでの調査所見から、SF012は1570年代頃に初めて構築され、街路を形成している土層群に複数の路面が認められることから、頻繁な改修が繰り返されており、最終的には17世紀初頭頃まで存続することが確認されている街路遺構である。SF012は原敷の区画遺構である堀や溝を埋め立てた上で、その上位にかぶさるような形で造成されていることになり、屋敷から街路へと変化するこの時期が、第52次調査区の遺構変遷の上で最も大きな画期と位置づけることができるであろう。その後、この路面を切って廃棄土坑SK015・SK024や連続土坑SK026・SK034が次々と掘削されるが、これらの土坑もすぐに埋め戻され、その上位や上面は再び街路として使用され続けるようになる。なお、堀や土坑・街路の切り合い関係や層序については第254図で示した調査区の土層図に典型的に現われているので、参照されたい。

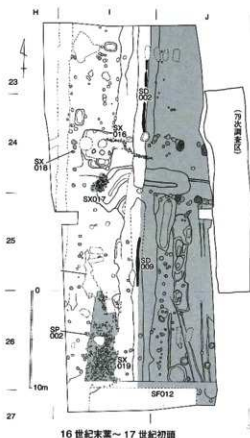
木戸

**16世紀末葉** 「府内古園」に描かれた時期と推定される段階である。第2南北街路SF012は幅員が10m以上の規模を有すると推定され、豊後府内のメインストリートあるいは基幹道路となる。溝SD059・SD061は、16世紀後葉の堀や溝(SD060・SD072)の位置や方向を踏襲するが、南北街路の側溝と考えられる遺構である。この時期には「大型柱穴列」と呼称した遺構が南北に2列認められ、これらは第2南北街路と御所小路の交差点付近に位置していることから、「木戸」と考えられる遺構である。2つの木戸の幅は約5m(2間半)を測り、この数値が御所小路の幅員と致すことにも注目しておきたい。

なお、第2南北街路の道路側溝SD059・SD061より西側は、国指定史跡大友氏館跡の領域に相当する。今回の第52次調査では、この領域に廃棄土坑2基(SK020・SK021)や鳥津侵攻時の焼土(SX001)・柱穴数基を検出したものの、当該段階の大友氏館跡に直接関連するような築地や門などの遺構を検出できなかった。この状況については、①当該段階の築地や門が本来存在していたが既に削平され完全に消滅してしまった、②この領域に特筆すべき遺構、すなわち大友氏館に直接関連するような施設が存在していなかった、という2通りの考え方が可能となる。近年の調査動向としては、後者の②の考え方が有力となってきているような印象を受ける。またこの考え方に立脚して、第2南北街路と館本体との間に幅10mほどの「空閑地」(空き地)が存在したことを指摘し、この「空閑地」を『年中作法日記』に見られる「馬立所」(武士などが騎乗してきた馬などを繋ぎ留めておく場所)として積極的



第310図 第52次調査区遺構変遷図①(1/400)



16世紀末葉～17世紀初頭

第311図 第52次調査区遺構変遷図② (1/400)

に解釈する説<sup>6)</sup>もある。以上の考え方の当否については、今回の調査所見のみでは結論を出すことができず、今後の調査の進展によって解決されることを期待したい。

16世紀末葉～17世紀初頭 鳥津侵攻の天正14年(1586)以降に比定される段階である。第2南北街路SF012は引き続き存続しており、木戸と想定される大型柱穴列も数回の改修が行われていることから当該段階にも存在した可能性が高いと考える。街路に付属する側溝は規模を大幅に縮小しているが、やはり存在しているようである(SD009・SD002)。

大友氏館跡の領域では、埋土に焼土を多く含む柱穴30基ほどが当該段階に位置づけられる遺構と推定されるが、建物としてまとまるものは存在しない。大友氏館跡第12次調査では、大友氏館跡は天正14年(1586)の鳥津侵攻後に再建や復興が行われず、館の敷地内に町屋域が進出してきてといった調査成果が得られている。今回の府内町跡第52次調査で確認された埋土に焼土を多く含む柱穴群も、館の敷地内に進出した町屋に関連する遺構である可能性が考えられる。また、集石遺構SX019では、礎石と推定される大型の礎4個が廃棄された状態で出土した。礎石の中には二次的な被熱を受けたものが認められ、これらは本来大友氏館跡の建物で使用されていたものが天正14年(1586)の鳥津侵攻によって廃絶し、その後廃棄されたと推定される。大友氏館跡の廃絶時期を示唆する遺構のひとつであると考えられる。

以上、第52次調査の遺構については、「14世紀」・「16世紀前葉～中葉」・「16世紀後葉」・「16世紀末葉」・「16世紀末葉～17世紀初頭」の5段階の変遷が確認できた。「16世紀末葉」の段階に第2南北街路が構築され、調査区周辺の空間利用が屋敷(武家屋敷?)から街路(第2南北街路)へと大きく変遷する画期が認められる。また、大友氏館跡の状況についても、当初予測された築地や門に関連する遺構は検出できなかったものの、館の廃絶を示唆する遺構を検出することができ、一定の調査成果を得ることができたことを指摘しておきたい。

註 (6)大分市教育委員会『府内のまち 宗麟の栄華 中世大友再発見フォーラムⅡ』8頁